

国立国会図書館



ようこそ、実験室へ —NDL ラボの誕生・現在・未来

パピルスからデジタルまで —フランス国立古文書学校の図書館員教育

世界図書館紀行 カナダ議会図書館

2014.7/8
No.
640/641

国立国会図書館利用案内

東京本館

所在地 〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話番号 03(3581)2331
利用案内 03(3506)3300(音声サービス)
ホームページ <http://www.ndl.go.jp/>
利用できる人 満18歳以上の方
ただし、満18歳未満の方には、個別に相談に応じています。詳しくはホームページをご覧ください。
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料 和洋の図書、和雑誌、洋雑誌(年刊誌、モノグラフシリーズの一部)、和洋の新聞、各専門室資料

サービス時間

開館時間	月～金曜日 9:30～19:00 土曜日 9:30～17:00 ※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の開室時間は17:00までです。	即日複写受付	月～金曜日 10:00～18:00 土曜日 10:00～16:00
資料請求受付★	月～金曜日 9:30～18:00 土曜日 9:30～16:00 ※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の資料請求時間は16:00までです。	後日郵送複写受付★	月～金曜日 10:00～18:30 土曜日 10:00～16:30

★登録利用者限定のサービスです。

■見学のお申込み／国立国会図書館 利用者サービス部 サービス運営課 03(3581)2331 内線25211

関西館

所在地 〒619-0287 京都府相楽郡精華町精華台8-1-3
電話番号 0774(98)1200(音声サービス)
ホームページ <http://www.ndl.go.jp/>
利用できる人 満18歳以上の方
ただし、満18歳未満の方には、個別に相談に応じています。詳しくはホームページをご覧ください。
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料 和図書・和雑誌・新聞の一部、洋雑誌、アジア言語資料・アジア関係資料(図書、雑誌、新聞)、科学技術関係資料、文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書、博士論文

サービス時間

開館時間	月～土曜日 10:00～18:00	即日複写受付	月～土曜日 10:00～17:00
資料請求受付★	月～土曜日 10:00～17:15	後日郵送複写受付★	月～土曜日 10:00～17:45
セルフ複写受付	月～土曜日 10:00～17:30	★登録利用者限定のサービスです。	

■見学のお申込み／国立国会図書館 関西館 総務課 0774(98)1224 [直通]

国際子ども図書館

所在地 〒110-0007 東京都台東区上野公園12-49
電話番号 03(3827)2053
利用案内 03(3827)2069(音声サービス)
ホームページ <http://www.kodomo.go.jp/>
利用できる人 どなたでも利用できます。
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 月曜日、国民の祝日・休日(5月5日こどもの日は開館)、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
※第一・第二資料室は、休館日のほか日曜日に休室します。メディアふれあいコーナーと本のミュージアムは、行事等のため休室することがあります。
おもな資料 国内外の児童図書・児童雑誌、児童書関連資料

サービス時間

開館時間	火～日曜日 9:30～17:00	※1階子どものへや、世界を知るへや、3階メディアふれあいコーナー、本のミュージアムの利用時間は、開館時間と同じく9:30～17:00です。		
第一・第二資料室の利用時間	閲覧時間	火～土曜日 9:30～17:00	資料請求受付	火～土曜日 9:30～16:30
複写サービス時間	即日複写受付	火～日曜日 10:00～16:00	後日郵送複写受付	火～日曜日 10:00～16:30
	複写製品引渡し	火～日曜日 10:30～12:00 13:00～16:30		

■見学のお申込み／国立国会図書館 国際子ども図書館 03(3827)2053 [代表]

- 02 『少年文友』第四号 少年投書家による地方同人誌（布川文庫の雑誌コレクションから）
今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から
- 04 ようこそ、実験室へ NDLラボの誕生・現在・未来
- 06 本は知識への入り口 読み方を広げる「電子読書支援システム」
- 09 高度情報化時代の知への貢献、皆様もいかがですか？
クラウドソーシングによる日本語資料のデジタル翻刻の試み
- 12 パピルスからデジタルまで
一フランス国立古文書学校の図書館員教育
- 17 国立国会図書館にない本(続編)
一戦前・占領期の雑誌を求めて
- 20 世界図書館紀行 カナダ議会図書館

27 館内スコープ

地図を探すための地図

28 本屋にない本

○『図録桐生からくり人形芝居』

29 お知らせ

- 東京本館の資料の一部を関西館へ移送するため、資料の利用を一時休止します
- 利用者登録についてのアンケートご協力をお願い
- 本の万華鏡（第16回）「日本近代建築の夜明け～建築設計競技を中心に」
- 関西館小展示（第16回）「宇宙に夢中—古代の宇宙観から「はやぶさ」まで—」
- 国立国会図書館データベースフォーラム—遺跡研究から見る図書館とデータベース—（関西館）
- 平成26年度資料デジタル化研修
- 国際子ども図書館展示会「世界のバリアフリー絵本展2013—国際児童図書評議会2013年推薦図書展」
- シリーズ・いま、世界の子どもの本は？（第8回）「いま、スペイン語圏の子どもの本は？」
- 平成26年度「国立国会図書館国際子ども図書館児童文学連続講座—国際子ども図書館所蔵資料を使って」
- 国際子ども図書館講演会「ドイツの児童文学作家クラウス・コルドン講演会 わたしの物語作法—古きベルリンの若者たち」
- 新刊案内 国立国会図書館の編集・刊行物

『少年文友』 第四号

少年投書家による地方同人誌（布川文庫の雑誌コレクションから）

長尾 宗典

出版界で長く活躍した布川角左衛門（1901～1996）氏が収集した出版関係資料からなる「布川文庫」には、博文館の『太陽』など著名な雑誌の創刊号のほか、いくつかの珍しい雑誌がある。今月紹介する『少年文友』（写真1）は、そのような稀覯雑誌のひとつである。

主だった図書館で同誌を所蔵している機関は見当たらないが、布川文庫に1冊だけ残っている第4号は、布川氏が偶然古書店から購入したもののようである。

発行元は、長野県上田町（現、上田市）にある「文友会」。同会は松本や小諸、佐久などにも支部を持ち、雑誌には茨城県からの寄稿もあった。内容は論説、随筆、紀行文や、漢詩、俳句、短歌などからなる。裏表紙に懸賞文の募集広告が載っている（写真2）。明治30年代には、博文館の『中学世界』や『文章世界』、少年園（のちに内外出版協会となる）の『文庫』など、投書を掲載する雑誌が人気となっていたが、地方でも、これを模した投稿同人雑誌が、旧制中学の学生を中心に編集され多数発行されており、彼らは文通を通じて同人誌相互のネットワークを作り上げていた。上田にある文友会に、松本や小諸、佐久だけでなく、茨城県在住の会員がいたことは、その証左である。『少年文友』も、このような同人雑誌の一種と思われるが、明治後期における地方同人雑誌の興亡を描いた小木曾旭晃『地方文芸史』などには、その誌名は登場しない¹。

表紙をめくると、数名の「謹賀新年」の挨拶が目に入る。挨拶に列記された人名は、同誌の編集・発行に関わった同人と思われ、プロフィール未詳の人物が多いものの、なかには注目すべき人名もある²。ひとりには畔上賢造（1884～1938、写真3）。旧制上田中学を経て早稲田大学に入った彼は、後に内村鑑三門下の無教会派クリスチャンとして活動し、内村の『聖書之研究』の編集補助や、自ら『日本聖書雑誌』の創刊に携わり、雑誌を通じた伝道を行なっていった³。

もうひとりには栗山信夫（1882～1942）。後に万朝報理想団のメンバーとなり、初期社会主義者として木下尚江と交流を持った人物である。新聞記者として活躍したのち、民政党系の上田市議員も務めたという。『少年文友』の彙報欄によると彼は同会の会計事務担当だった。1880年代生まれの彼らは、当時10代で編集発行の事務を担っていたことになる。

『少年文友』誌がいつまで存続したのかはわからないが、この資料には、写真4のような会員募集広告の草稿が挟まれていた。地方における雑誌発行の営みが、少年たちの文芸への関心を盛り上げたことは注目しておいてよいだろう。

出版研究のための資料を集めた布川文庫の書架に、無名の雑誌が佇んでいるのは意外な感じもするが、全く顧みられないような1冊の本も、忘れられた出版史や思想史、文学史のひとつまを語る、かけがえのない資料となるのである。（ながお むねのり 利用者サービス部人文課）

1 小木曾旭晃『地方文芸史』（教育新聞発行所、1910）。また、当時の地方文壇の概要は、林眞「明治後期の地方文芸雑誌」『書誌索引展望』3(2)(1979.5)、長尾宗典「高山樗牛と『田舎教師』」『社会文化史学』51(2009)などを参照。

2 赤羽篤【ほか】編『長野県歴史人物大事典』（郷土出版社、1989）、松本衛士『長野県初期社会主義運動史』（弘隆社、1987）、上田市誌編さん委員会編『新しい社会を求めて』（上田市、2002）などを参照。

3 無教会派の伝道が雑誌を活用したものだった点については、赤江達也『紙上の教会』と日本近代』（岩波書店、2013）参照。

写真1



写真2



『少年文友』第4号
 明治31 (1898) 年2月
 <請求記号 VG1-84 >



写真3
 (『畔上賢造著作集』第1巻
 畔上賢造著作集刊行会 編・刊
 昭和15 口絵より)

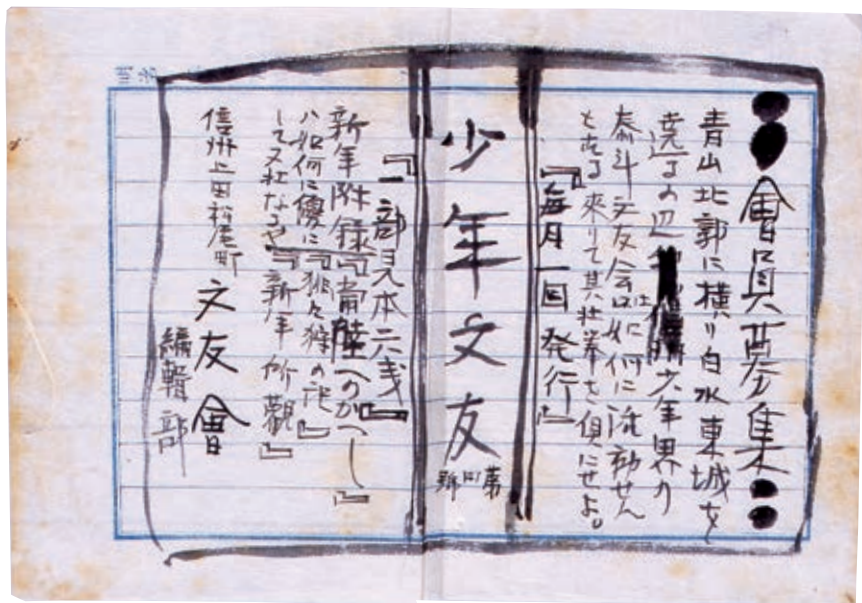




写真4



布川文庫について

布川文庫は、東京本館の人文総合情報室で閲覧できます。図書は人文総合情報室備付けの「布川文庫閲覧用リスト」(請求記号順、タイトル順)で、また、雑誌等の逐次刊行物は、リサーチ・ナビの専用ページ (<http://rnavi.ndl.go.jp/humanities/nunokawa.php>) から検索が可能です。

布川氏の人と業績については、日本出版学会「布川角左衛門事典」編集委員会 編『布川角左衛門事典』(「布川角左衛門事典」刊行会, 1998)*左肖像はp.231より、小林恒也『出版のころ: 布川角左衛門の遺業』(展望社, 2011)、長尾宗典「この人を知る 布川角左衛門」『国立国会図書館月報』594 (2010.9) 号を参照。



ようこそ、実験室へ

NDLラボの誕生・現在・未来

電子読書支援
システム

NDL
laboratory



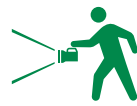
翻デジ 2014

NDL
laboratory



NDLラボサーチ

NDL
laboratory



NDL
laboratory

1 誕生～NDLラボとは

NDLラボをご存知ですか？

国立国会図書館ホームページ「オンラインサービス一覧」のいちばん下をご覧ください。カテゴリ「実験システム公開」にひとつ載っているNDLラボは、2013年5月7日に新しい図書館サービスのための実験環境としてオープンしたウェブサイトです。

情報技術の急速な進展の中、従来の枠にとどまらない先進的な図書館サービスを実現するための調査研究を目的として、2011年10月に当館電子情報部電子情報サービス課に次世代システム開発研究室が設置されました。新しい技術の調査研究には、外部の力が不可欠です。NDLラボは、大学や研究機関等の研究者と協力し、その知見を活用していく場として誕生しました。

当館からは研究者に、NDLラボのサーバ環境や当館が持つデジタル化資料のデータ・書誌データなどを提供し、研究者はその資源を使ってソフトウェア等の実験をします。研究者が開発したソフトウェアはNDLラボ環境に移植され、インターネットを通じて多く

の人に試していただけるようになります。こうした実験の成果は、当館のサービス、ひいては我が国の次世代図書館サービスの利便性向上に貢献することを目指しています。

研究者の方々に対して、今までに以下のテーマについて協力依頼の呼びかけを行ってきました。またそれ以外にも、未来の図書館サービスに関わる新しい技術を使った提案を広く募集しています。

電子読書支援システム

当館や他機関のデジタルアーカイブにおいてデジタル化資料を便利に閲覧する方式。

テキスト化及び検索

近代デジタルライブラリーで公開している著作権保護期間満了のデジタル化資料等を対象とした、光学文字認識（OCR）によるテキスト化の高精度化やその検索など。

NDLラボサーチ

実験用検索システムNDLラボサーチ（後述）の新機能等。

国立国会図書館東日本大震災アーカイブ（愛称：ひなぎく）のデータ利用

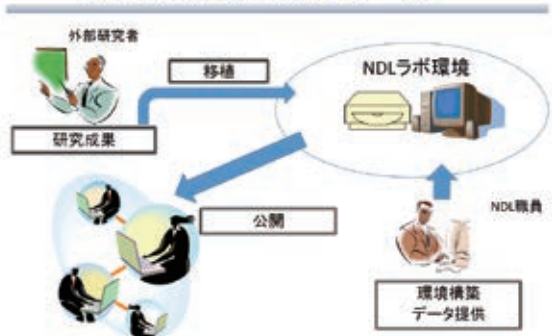
ひなぎくのAPIを用いたサンプルアプリケーションの開発。

2 現在～3つのシステム

現在NDLラボで公開しているシステムは「電子読書支援システム」「翻デジ」「NDLラボサーチ」の3つです。

まずはNDLラボサーチをご紹介します。

NDLラボ環境の利用イメージ





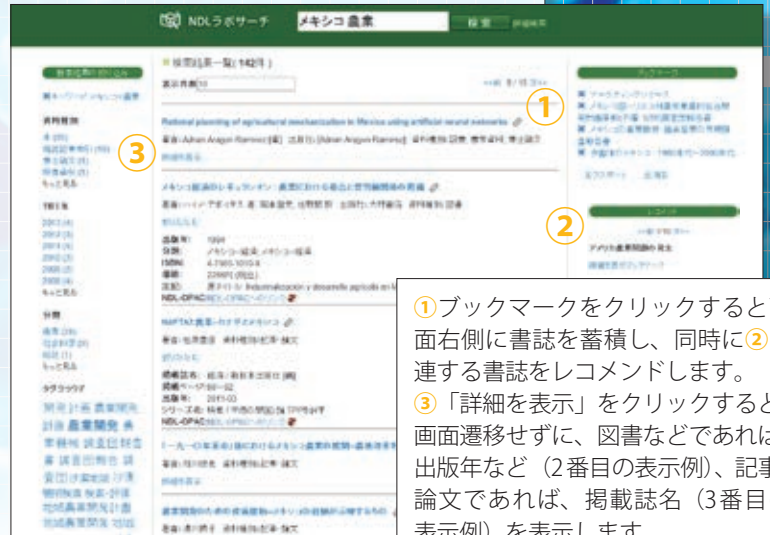
NDL ラボサーチは当館の情報検索サービス「国立国会図書館サーチ」から、外部データベースとの統合検索・横断検索、ヘルプ等の機能を省き、検証用の新機能を追加した、実験用の検索システムです。検索対象は当館の所蔵資料（図書・雑誌・新聞等）と、雑誌記事索引です。2013年9月に公開を開始し、その後2014年3月に現行の新バージョンになりました。現在の主な機能は以下のとおりです。

表示の高速化：JavaScriptを使ってブラウザ側で検索以外の処理を行うことで表示の高速化を図り、軽快な動作を実現しました。

ブックマーク機能：検索結果一覧画面で選択した書誌を「ブックマーク」として画面右側にためておき、リストとして出力できます。同時に、ブックマークした書誌に関連する書誌が「レコメンド」として表示され、更にブックマークに追加していくことができます。

検索結果—書誌詳細の一面化：書誌の詳細情報は検索結果一覧画面上で表示できるようにし、画面遷移を不要としました。

検証中の機能は、国立国会図書館サーチや将来の検索システムに取り込んでいくことを目指しています。ぜひお試しください、ご意見・ご要望をお聞かせください。



- ①ブックマークをクリックすると画面右側に書誌を蓄積し、同時に②関連する書誌をレコメンドします。
- ③「詳細を表示」をクリックすると、画面遷移せずに、図書などであれば、出版年など（2番目の表示例）、記事・論文であれば、掲載誌名（3番目の表示例）を表示します。

3 未来～これからのNDLラボ

2014年1月にはNDLラボ事業に関する有識者会議を開催しました。大学等の研究者である外部有識者に今までの取り組みを報告してフィードバックを受けることで、今後の事業について示唆を得ることを目的としています。会議での主なご意見を紹介します。

- ・国立国会図書館が解決したい課題をもっと具体的に示した方が、研究者から課題解決の提案が得られやすい。
- ・学会等でラボ事業を積極的に紹介し、課題の告知と取り組みの紹介を行うことで、研究者の募集と成果の発表の場が得られる。
- ・研究環境としては、APIを使いやすくする、

提供可能なデータ等の条件を明確に提示するなどの改善が求められる。

これらのご意見を参考に、解決すべき課題の明確化、研究環境条件の明示、学会等における研究者への働きかけなどを進め、より多くの研究者と協力し事業の活性化を図りたいと考えています。また同時に、公開したシステムを多くの方に使って試していただきたいと考えています。

NDLラボは、未来の図書館のための実験室です。是非アクセスして、体験してみてください。

（電子情報部電子情報サービス課

次世代システム開発研究室）

o.ndl.go.jp

本は知識への入り口

読み方を広げる「電子読書支援システム」

国立情報学研究所 阿辺川武

1. はじめに

電子読書支援システムは、デジタル化された書籍や報告書をコンピュータの画面で便利に読むためのシステムで、特徴として書籍の本文ページに含まれるキーワードの説明や、本文と関連する外部のコンテンツなどを、画面内の左右のスペース（脚注部）に表示する機能を持っています。NDLラボでインターネット公開しているシステム（以下、本システム）では、国立国会図書館の近代デジタルライブラリーの書籍の一部と『情報通信白書』を閲覧することができ、実際にユーザに使用してもらいながら機能を検証しています。

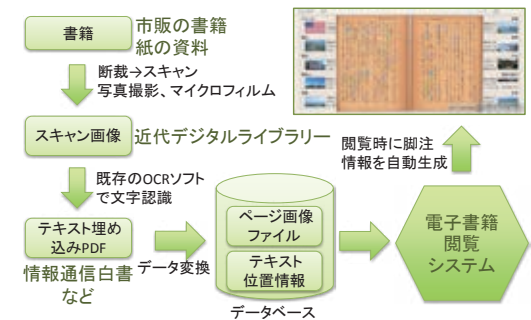
私の所属する国立情報学研究所では、「新書マップ¹」や「Webcat Plus²」といった書籍の紹介・検索のサービスを提供しています。開発当時は本の情報といっても書誌情報と数行の概要と目次だけで、これらの情報を使っていかに効率的に書籍を見つける手伝いができるかを念頭において開発してきました。その後、書籍の電子化が進んだことで本文テキストデータが手に入りやすくなり、次の段階として読書支援をめざす研究が始まりました。

読書支援システムの開発を始めた当初は、テキストの使用について、個別に著者から研究用に許諾を得たり、著作権保護期間が満了した洋書を用いたりして研究を行ってきましたが、一般公開して広くユーザの意見を得ようと思っても、公開できる日本語の書籍は限られるため困っていました。そんな中、国立国会図書館から声掛けがあり、近代デジタル

ライブラリーを用いれば我々の目的を果たすことができるということで、NDLラボ事業へ参加することとなりました。

2. 電子読書支援システムについて

図1



データの前処理

本システムのデータ処理の簡単な仕組みを図1に示します。市販の書籍や紙の資料の場合にはスキャナーやカメラを用いてデジタルデータにします。本システムで対象としている近代デジタルライブラリーのページスキャン画像や『情報通信白書』のPDFは、あらかじめデジタルデータで公開されているのでそれを使います。

次に書籍の画像データから本文（テキストデータ）を取得するために、光学文字認識（OCR）機能を使用して、画像から文字を取得します。現在の技術では100%の認識精度で文字を得ることは難しく、また古い書籍の場合は撮影品質が良くないと現在の書体と異なる活字を用いているため、認識精度はさらに悪くなっています。OCRで認識した文字は、本文情報として座標（ページ中の位置）

1 <http://shinshomap.info/>

2 <http://webcatplus.nii.ac.jp/>



Knjabinot!



とともにデータベースに記録しておきます。近代デジタルライブラリーの画像は、古い資料が多いため、OCRの精度が非常に低いものがあり、正しいテキストデータが得られません。そこでサンプルとして2冊、人手で文字認識誤りを修正した書籍を掲載しています。ただし、すべての書籍について人手で誤りを修正することは、手間とコストの面から難しいため、OCR精度の向上が課題の1つとなっています。

読書支援機能

書籍のページ画像を画面中央に表示し、その左右のスペースにページ本文の文字列から得られる情報を提示します(図2)。現在のシステムでは、書籍本文中で出現したキーワードに対応してWikipedia日本語版から情報を取得し、キーワードの概要と、写真があるときにはそのサムネイル画像を表示します。説明する概念によっては言葉よりも画像の方が理解を促進させるものがあり、写真の掲載は認識に大きな影響があります。また画像とともに書籍を眺めることで、より記憶に残りやすいという効果もあります。

さらに、百科事典や辞書の語釈文を表示したり、ページ本文と関連する外部の情報を表示することも可能です。本システムでは国立情報学研究所でサービスされている「新書マップ」のデータを利用して、本文と関連する新書を表示しています。専門性が高い内容

について一般向けに解説されている新書を見つける、あるいは過去の出来事に対し現代の新書ではどのように語られているかを知るといった目的を想定しています。

電子読書支援システムはこのような形で、書籍が構築する知の世界と、その知識の源となる外部の世界をつなげる機能を持っています。このシステムにより書籍が世界の入口となり、著者が記述しきれなかった広大な世界へ読者を誘うことを、あらゆる方法で支援したいと考えています。

自動索引生成機能

ボリュームのある書籍では巻末に索引があります。従来の索引では、著者や編集者が自ら重要であると思われるキーワードを選び出していました。このシステムでは脚注表示機能と同様の仕組みを用いて書籍全体からキーワードを自動的に抽出して、それらを五十音順や出現回数順に並べて表示します(図3)。





紙の書籍の索引ではページ番号が記載されますが、電子的な索引は本文に直接リンクできるため、ページ番号を記述する必要がありません。代わりに章ごとの出現回数を数え上げて表示しており、これにより書籍全体でのキーワードの出現傾向を把握することができます。特定の章に重点的に出現しているならばその章のトピックを表し、書籍全体で出現していれば書籍の主題にかかわるキーワードと考えることができます。

3. ユーザからの意見と今後の展開

NDLラボのページには意見・要望を投稿するフォームがあり、ユーザから様々な意見が寄せられていますので、ここでいくつか紹介します。

「脚注として表示する情報のカテゴリを指定できるとよい」

脚注部に表示する情報は、Wikipedia本文中で、キーワードとして選ばれる確率が高いという基準で選択していますが、表示してほしい情報は読者によって様々なはずです。そこで今後は簡単な試みとして「人物」「地名」のような、キーワードのカテゴリを指定できる機能を追加していきたいと思います。

「脚注表示を、外国語原著や古典籍の注釈表示に使いたい」

授業形式で書籍を輪読する際に教師自らあ

るいは生徒同士で解釈の難しい箇所注釈をつけて、それを共有したいという要望がありました。電子読書支援システムでは、脚注部に表示できる情報は辞書や百科事典の他にも柔軟に対応できますので、ユーザにより発信された情報を、本文とともに掲載できる仕組みを実現していきたいと思います。

「このシステムで何かが『読める』とは思えない」

確かに文学作品などは、脚注部をいちいち参照し読書を中断させる読み方は向いていないでしょう。このシステムでは、古文や旧字体のような現代の表記法との違いに戸惑う読者、あるいは専門分野外の書籍をまずは眺めてみたい読者に対して、読書の支援をすることが目的の1つです。

このように、開発者が想定していなかった意見が得られるのも一般公開をおこなう利点の一つです。電子読書支援システムのNDLラボでの活動は今年度も続いていますので、引き続きユーザからのご意見を受け付けるとともに、読書支援機能および情報抽出機能の強化を考えています。読書支援機能として、可読性向上のための紙面背景の白色化や、モバイル端末対応のインターフェース作成、情報抽出機能としてOCR精度の向上とキーワードのカテゴリを使用した情報提示法の改善に取り組む予定です。



プロフィール (あべかわ たけし)

2006年東京工業大学大学院博士課程(工学)を修了後、東京大学教育学研究科特任研究員を経て、2009年国立情報学研究所連想情報学研究開発センター特任助教、現在同研究所コンテンツ科学研究系特任准教授。研究分野は自然言語処理、図書館情報学、日本語学習支援。



高度情報化時代の知への貢献、 皆様もいかがですか？

クラウドソーシングによる日本語資料のデジタル翻刻の試み

人文情報学研究所 永崎 研宣



1. 「翻デジ2014」の動機と始まり

仕事柄、「日本文化に特段の興味を持っていない欧米の人文系研究者」と話をする機会が多くあります。そういう人達からしばらく前に立て続けに言われたのが、「日本は文章よりも絵で情報をやりとりしているところが興味深い。マンガ、アニメもそうだが浮世絵にもそれが現れているので伝統的にそうなのだろう」というようなことでした。確かに昨今の日本の漫画やアニメ、ゲーム等のグローバルなアピールぶりは素晴らしく、また、浮世絵についてはWeb発信が比較的進んでいるということもありますので、グローバルに広まっている日本の情報を拾っていくとそういう日本像が形成されるのかもしれない、とは思いますが、これは筆者としては大変忸怩たるものがあります。そもそも、日本は江戸時代には比較的識字率が高く、活版印刷を本格導入する以前から木版による本の出版も多くなされてきました。また、現代においても、世界のパブリックドメインのテキストを収集公開しているグーテンベルクプロジェクトでさえ4万5千点くらいにとどまっているところ、ほとんど日本語の本しか公開していない青空文庫が1万点以上のテキストを公開しているのです。これほど文章に慣れ親しんでいる我々の姿があまり伝わっていない、という事態をもう少しなんとかした方がよいと思ったのが、「翻デジ2014」システムの構築をしようと思いうに至った最初の動機でした。

2. クラウドソーシング・デジタル翻刻の潮流

一方で、欧米ではクラウドソーシング¹によるデジタル翻刻²が流行しつつあります。英語や欧米の言語なら光学文字認識（OCR）で簡単に読めるだろう、と思ってしまいがちですが、実際にはうまくいく場合ばかりではないようで、特に手書きの文書をテキストデータに起こそうとするとOCRでは全然歯が立たず、人力で取り組むしかないということから、クラウドソーシング・デジタル翻刻という流れができていったようです。特に、ニューヨーク公立図書館でのレストランメニュー、米国公文書館での手書きの公文書、ロンドン大学での思想家ベンサム（Jeremy Bentham）の自筆原稿に関する取り組みが有名です。クラウドソーシング・デジタル翻刻のプロジェクトを簡単に始められるようにするWebシステムも、筆者が知るだけで3種類ほど提供されるに至っています。

さて、この現状を真摯に捉えた日本デジタル・ヒューマニティーズ学会では、プロジェクト Transcribe JP を開始しました。日本語資料のデジタル翻刻全般について検討し実践することを目的とするプロジェクトです。そして、Transcribe JPでは、最初のターゲットとして近代デジタルライブラリー（近デジ）のデジタル翻刻を選択しました。

1 インターネットなどを通じて不特定多数の人々に仕事を委託すること。「クラウド（群衆）」と「ソーシング（業務委託）」を組み合わせた造語。

2 すでにある本や原稿から文字起こしをして電子テキスト化すること。木版や活版で新たに起こし刊行する「翻刻」に由来する。





3. 近デジで翻デジ

近デジでは、すでに数十万点の図書の画像を公開しているにもかかわらず、タイトル・目次くらいしか検索できません。なんとももったいないと多くの人が思っていたことでしょう。しかし、青空文庫が取り組んでいるように、完全に近い翻刻テキストを作成していくとなると、校正も含めてかなり大がかりな体制が必要となります（この点においても青空文庫のボランティアの皆様にはひたすら頭が下がります）。そこで、書物の画像が公開されていることを前提として、画像に含まれるテキストを検索できるようにしつつ、そのテキストの正確性は画像を参照してもらうことで担保するという仕組みを考えました。そして、これを実現するためのシステムに「翻デジ2014」と名付けました。「翻デジ2014」の方針は次のとおりです。

このシステムは以下のことを目標としています。

- ・近代デジタルライブラリー等の画像でしか提供されていない日本語資料の本文を多少なりともGoogleやBaidu、Bing等の全文検索エンジンから検索できるようにする（検索性を高める）。
 - ・Web上に比較的利用しやすい日本語のテキストデータを増やす。
 - ・テキストデータを複数人で入力する仕組みを提供する。
 - ・日本語資料のためのクラウドソーシングによるデジタル翻刻の運用に関わる経験を蓄積・公開し、同種のプロジェクトを立ち上げやすい状況を作る。
- 一方、以下のことを目指しません。
- ・誰もが正確と認めるデジタルテキストの翻刻
 - ・正確なデジタル翻刻とは何かという議論とその結論
 - ・統一的なフォーマットに基づくデジタルテキストの作成

このようにして「翻デジ2014」は始まったのでした。

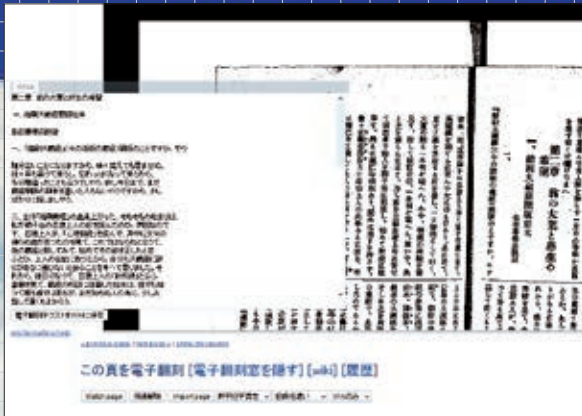
4. 翻デジの面白さ

特に若い人を中心に、Webで検索した情報を頼りに物事を組み立てていくことが増えてきています。しかし、Webの情報は正確性が高くないものが多く、いつの間にか内容が変更されたり、ページ自体が無くなってしまっていることもあります。このような状況に対して「翻デジ2014」はとても有効に対応できるものとなっています。つまり、翻デジの機能を使いテキスト入力をしておけば、それがGoogleなどでヒットするようになり、ヒットしたページから近デジのページ画像にリンクされて、その内容を確認できるようになります。そして、その確認は永続的にできることになっているのです。

現在の近デジでは「永続的識別子」と各ページの画像番号との組み合わせで各ページのURLを指定できるため、一度、近デジのページ画像の特定のURLにリンクした文字列は、国立国会図書館がそれを維持し続ける限り、ずっと利用できます。つまり、基本的に画像が無くなることはなく、変更もされにくい。このような確実性の高い情報がWeb上で検索できるようになるという状況は、Webという高度情報化時代を象徴する場において、知を着実に蓄積していくためのとても有効な手段の一つとなりそうです。

たとえば、筆者は、「大日本校訂縮刷大蔵經」³という明治時代に出版された初の金属

3 NDL-OPAC では「大蔵經：大日本校訂[縮刷蔵經]」



活字版大蔵經の刊行に関わる顛末を記した本を2冊ほど、部分的に翻刻してみました(『島田蕃根翁』と『読書雜記』)。その情報は、それまでWeb上にはほとんど存在しなかったものですが、これを翻刻したことで、この大蔵經の刊行に関わった人名や関連する単語をWeb検索すると、これらの顛末記がヒットするようになりました。たとえば、刊行に関わった人のなかには別の方面でも有名な人物もいますので、そういった人の名前を検索した時にこの大蔵經の刊行に関わるエピソードも容易に知ることができるのです。誰かがこの情報を別の形で知識として編み上げてくれるかもしれないと思わせてくれるところがとてもわくわくします。

筆者自身は、このシステムを構築するところから自力で行ったので苦労も多く大変でしたが、皆様は、登録のための手続きを少ししていただくだけで、この取り組みに参加できます。あとは画面を見ながら一部だけでも文字を入力すれば、検索が可能になります。もちろん、1冊の本のすべてのテキストを入力しても、青空文庫やTEI⁴等の形式で入力していただいても結構です。「翻デジ2014」では、そういったことを全体に強制しませんので、参加者は、各自自由に取り組んでいただけます。この「翻デジ2014」に意義を感じられましたら、ぜひ参加をご検討ください。

5. 終わりに

さて、せっかくですので少し苦労話も書かせてください。冒頭、欧米でこういうプロジェクトを簡単に開始できるWebシステムが公開されているとご紹介しました。もちろん無料で使えますのでこれは大変ありがたいと採用してみたのですが、日本語をシステム内部できちんと扱えるようにすることと、近デジの仕組みにあわせることのために、正月休みをほとんどつぶしてしまいました。とりあえずのパイロットプロジェクトということで、予算ゼロで始めましたので、Webシステムの設置や改造からすべて1人で取り組みまして、なかなか大変でした。国立国会図書館の次世代システム開発研究室の方々にはサーバの利用についてご協力をいただき、今年度は国立情報学研究所からもご支援をいただけることになりましたので、徐々に輪が広がりつつあります。それでもやはり皆様のお力による翻刻テキスト拡充が一番の基本になりますので、よろしければぜひご協力よろしくお願いいたします。「翻デジ2014」の詳細については、

<http://lab.kn.ndl.go.jp/dhii/>
をご覧ください。



プロフィール (ながさき きよのり)

東京外国語大学、山口県立大学を経て人文情報学研究所主席研究員、東京大学大学院情報学環特任准教授。仏教学研究のデジタル化に取り組む傍ら、日本デジタル・ヒューマニティーズ学会事務局担当としてデジタル人文学全般の普及と実践に取り組んでいる。

4 Text Encoding Initiativeの略。同団体が推進する人文科学の資料をXML形式で符号化するための標準的ルール。

パピルスからデジタルまで フランス国立古文書学校の図書館員教育

大沼 太兵衛

はじめに

筆者は、平成23年8月から平成25年9月までの約2年間、長期在外研究員としてパリの国立古文書学校（École nationale des chartes、以下「ENC」といいます。）に留学する機会を得ました。ENCはフランスにおける図書館・アーカイブ¹分野の高等教育機関としては随一の存在ですが、これまで日本では、まとまった形で紹介されることはあまりありませんでした。そこで、本稿ではまず、ENCについて、その概要と歴史についてご紹介し、続いて、筆者がこの学校で学んだことに触れつつ、ENCが現代の課題に対してどのように取り組んでいるのかについてお話ししたいと思います。

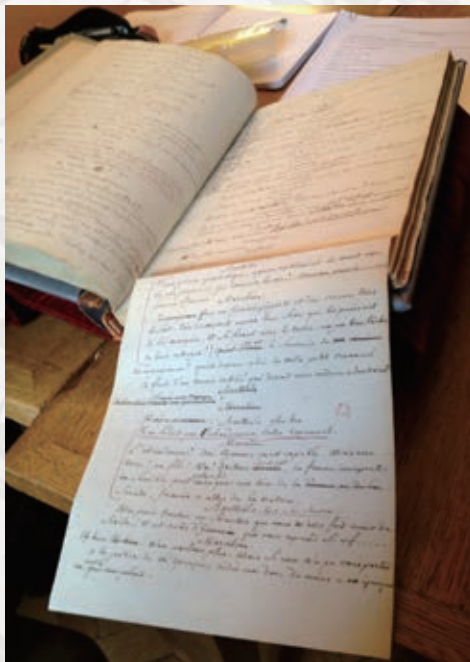
ENCとは

ENCはグランデコール（grande école）²の1つであり、その役割については、現行法規で次のように規定されています。

「国立古文書学校は、アーカイブと図書館に関わる学問的人材の養成を行うことをその目的とする。国の文化遺産について、その科学的知見及び活用に資する全ての人材の教育に貢献する。特に歴史資料の批判、活用、保存及び流通に関する分野における人文社会科学の学生の教育・研究に携わる。³」（下線は筆者による）

ここで大事なポイントは3つあると言えるでしょう。第1に、主に図書館員およびアーキビストを育成する教育機関であること、第2に、図書館とアーカイブの資料が「文化遺産」（patrimoine culturel、又は単に patrimoine）という上位の概念によって一つに括られていること、第3に、将来的に研究と実務の両面に携わる人材の教育を行うこと、の3点です。

ENCの本部はパリ5区のソルボンヌに置かれています⁴。全校生徒約150名という小さな学校ですが、本科である「Archiviste-paléographe」（直訳すると「アーキビスト・古文書学者」）コースを中心とし、3つの修士課程と1つの博士課程を併設しています。



ボーマルシェ「フィガロの結婚」自筆原稿
（「手稿資料」の授業にて）



ENC入口



修士2年目の授業が行われる国立文書館

ENCでは、史資料の解説・批判・分類・評価・活用などに携わる専門家を育てるための学問教育のみを行い、原則として実務教育は行いません。そのため、ENC卒業後、文化遺産分野における上級専門職である「コンセルヴァトゥール (conservateur)」⁵の資格を得て図書館・アーカイブなどへ就職することを希望する場合、専門別のグランデコールにさらに進学し修了する必要があります⁶。近年のENCの卒業生の進路は、約半数が図書館、約4分の1がアーカイブ、残りがその他（博物館／美術館、研究職など）、となっています（2006～2012年実績）。卒業生は、学校名にちなんで「シャルティスト (chartiste)」と通称されます。国立図書館 (BnF : Bibliothèque nationale de France)、国立文書館 (AN : Archives nationales) など、フランスの主要な図書館・アーカイブの管理職の多くは、シャルティストによって占められています。

ちなみに、一般に有名なシャルティストとしては、作家ロジェ・マルタン・デュ・ガール、ジョルジュ・バタイユ、思想家のルネ・ジラルなど挙げられます（余談ながら、詩人ボードレールは若い頃、ENCの入学試験に落ちています）。図書館・書物史の分野では、名著『書物の出現』⁷を著したアンリ＝ジャン・マルタンがよく知られているでしょう。

ENCの設立と伝統

18世紀末、フランス革命は旧来の文化の大規模な破壊をもたらしました。教会は壊され、貴族・聖職者の財産は略奪に遭い、あるいは新政府によって没収されました。この状況に対しては、早くも革命初期から行政の一部や個人による保護の動きが見られましたが、それが本格化するのが王政復古期（1815～1848年）です。ブルボン王朝の復活に象徴されるこの反動の時代は、国民国

1 英仏語の« archives »は、ある個人・団体が生産・受領した記録資料の集合、記録資料を扱うサービス部門、記録資料を収める施設（文書館）のいずれをも含む概念です。対応する訳語が日本語にはないため、本稿では原則としてそれらを区別せず「アーカイブ」とし、その専門職を「アーキビスト」で統一しました。

2 大学制度とは別に存在する、高度専門職養成を目的としたフランス独自の高等教育機関。

3 「国立古文書学校に関する1987年10月8日の政令第87-832号」第3条。

4 現在、ENCを含むパリ市内の10の高等教育機関の人文科学部門を、

パリ北部郊外のオーベルヴィリエに建設予定の共同キャンパスへ移転・集中させる「コンドルセ計画」(<http://www.campus-condorcet.fr/>)が進行しており、ENCも2018年以降に移転する予定です。

5 文字どおりには、「保存する者」「保護する者」の意。フランスでは、図書館、アーカイブ、博物館／美術館の上級専門職はいずれもこの資格名称で呼ばれ、実務家と研究者の両方の顔を持っています。

6 具体的には、図書館志望の場合は図書館情報学高等学院 (ENSSIB)、アーカイブの場合は国立文化遺産研究所 (INP) に進学します。

7 折田洋晴「フェーヴル、マルタン『書物の出現』(1958)」、『国立国会図書館月報』2010年7月(592)号を参照。

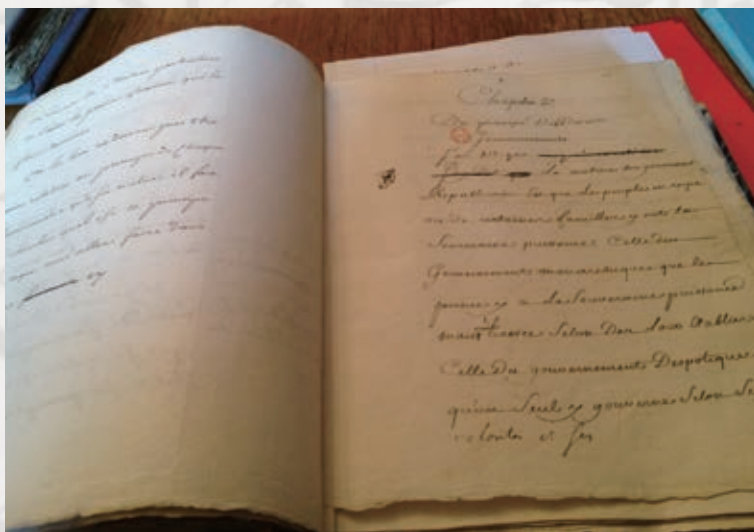
家の意識の高まりが自国の歴史への関心を促し、他方ではロマン主義の風潮がゴシック建築に代表されるような「中世」の再発見・再評価をもたらした時期でもありました。また、当時、革命期に貴族・教会などから没収された財産に含まれる大量の文書や書籍が国の管轄下に入っていました。しばしば中世のものをも含むこれらの資料を解説・整理・保管・活用できる人材は不足しており、その育成が課題となっていました。このような背景の下、1821年2月22日の勅令によってENC（当時は王立古文書学校、École royale des chartes）が設立されることとなります。

ENCは当初、主として中世の文書資料の解説・分類などの教育に特化した、教師2名・学生12名という小規模な集まりにすぎませんでしたが、19世紀を通じて、BnFやANなどと密接に連携しつつ、研究分野の拡充と高等教育機関としての体制の充実が図られ、徐々にその地位を確立していくこととなります。分野の拡充については、この時代に、古文書、写本、美術作品、歴史的建造物、考古資料といった、国の過去の文化を伝える諸事物が、前述の「文化遺産」という新たな概念の下、統一的に捉えられるようになってきたことを反映していると言えます（現在のフランスで、

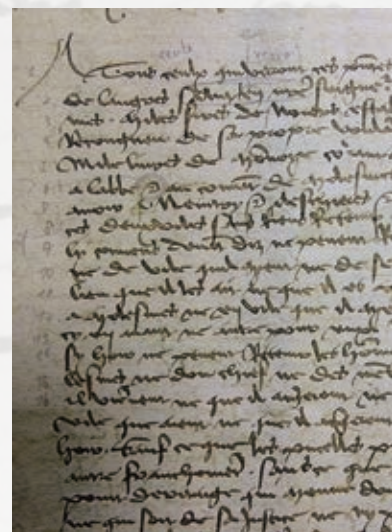
図書館、アーカイブ、博物館／美術館などにおける上級専門職がいずれも同じ「コンセルヴァトゥール」の職名で呼ばれるのは、このような考え方に基きます）。ここにおいて、図書館員であれアーキビストであれ、文化遺産を扱う者が身につけておくべき「共通の基盤」を広く学ぶという、今に続くENCの教育の伝統が形作られました。なお、この点に関しては、フランスの図書館・アーカイブの所蔵資料には古い時代のものが多く含まれ⁸、かつ非図書資料（古銭、美術品、博物資料その他）もしばしば所蔵するという事実を、日本と異なるフランス独自の事情として指摘しておくべきでしょう。

ENCの授業

ENCの授業の中心になるのは、やはり文字資料・記録資料に関する諸科目です。学生は、将来の専門に関わらず、アーカイブ学、公文書学⁹、古文書学、写本学、文献学、書物史、出版史、書誌学、ラテン語などを広く履修します。特筆すべきは、BnF、ANをはじめとする外部機関で、資料の現物を目の前にした講義が多く行われることです。これらの講義を通じて、パピルスの卷子から羊皮紙の写本、近代の革装本、さ



モンテスキュー「法の精神」自筆原稿（「手稿資料」の授業にて）



古文書解読の授業で使った古文書

らには様々な手稿資料や版画など、あらゆる時代・形態の資料に関する知識が教授されます。また、これらに加えて、美術史、考古学、法制史といった関連分野の科目も設けられ、さらに最近では、情報処理や電子文書のレコード・マネジメントなどの新しい内容も少しずつカリキュラムに入ってきています。このようにENCでは、中世から現代に至るまでの史資料を扱うための知識と方法論を徹底的に学びますが、これらに共通する性格を一言で表すならば、「歴史補助学」(science auxiliaire de l'histoire)であると言うことができるでしょう。ENCは、歴史補助学に特化した、世界的に見てもたいへんユニークな教育機関と言えます。



ENCの図書館

デジタル時代への対応：修士課程の設置

近年、フランス各地の図書館、アーカイブ、研究機関などでは、BnFの« Gallica »¹⁰や国営機関リポジトリ« HAL (Hyper articles en ligne) »¹¹に代表されるように、資料のデジタル化とデジタルデータの利活用(ウェブ上での公開、研究への応用など)が盛んに行われています。そのため、図書館員・アーキビスト教育においては、従来の素養に加えデジタル技術にも通じた人材育成が求められています。そうした時代の要請に応えるため、2006年にENC独自の修士課程として新設されたコースが、筆者が入学した《歴史研究に応用するデジタル諸技術(Technologies numériques appliquées à l'histoire)》です。

初年度は前述の伝統的なENCのカリキュラムに充てられ、2年目にデジタル技術に特化した講義と実習が行われます。具体的には、XMLを使った諸技術(ア

カイブの記述法、文書の構造化、XML文書の変換言語など)、データベース構築と電子図書館サイト作成など、実務で役立つ様々な技術や知識を実習形式で学び、年度後半には外部機関で実務研修が行われます。筆者はパリにあるフランス極東学院(École française d'Extrême-Orient)の図書館を選び、研修生として約3ヵ月間勤務するという貴重な経験を積むことができました。

全体として、この修士課程は、多くの内容を2年間という短い期間に詰め込んでいるため、やや駆け足のカリキュラムとなっている感は否めませんが、伝統的な基礎教育、デジタル技術の座学と実習、そして実務への応用と、各要素が順を追ってバランスよく盛り込まれており、時代の要請に応える図書館員・アーキビスト教育のありようとして、ひとつのモデルを体現していると言えるでしょう。

8 フランスの地方中核都市の図書館の多くは、大革命時の没収図書をコレクションの淵源とするため、貴重書を多く持っている傾向にあります。また県立図書館をはじめとする各地のアーカイブには、中世にまで遡る私文書・公文書が多く所蔵されています。

9 アーカイブ資料のうち特に歴史上の公文書についての分析を行う学問分野(仏: diplomatique)。

10 フランス最大の電子図書館サイト。現在、BnFの蔵書を中

心に約300万点の資料がデジタル化され、オンラインで公開されています。URL: <http://gallica.bnf.fr/>

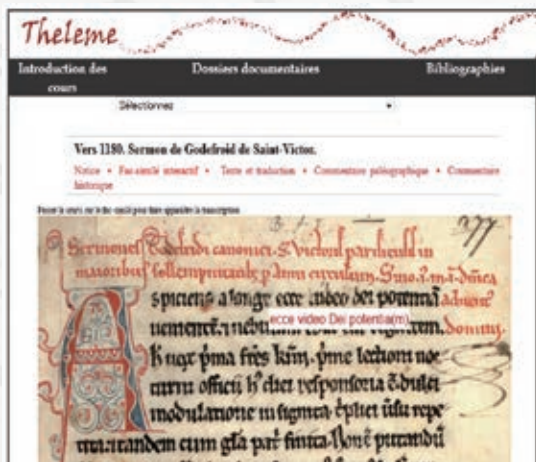
11 フランスの高等教育・研究機関のための共同プラットフォーム。参加機関は自力でシステムを開発する必要なく、HALのサーバ上に自機関のリポジトリを構築することができます。現在、学術論文等の全文データ約30万件が公開されています。URL: <http://hal.archives-ouvertes.fr/>

教育・研究へのウェブの活用

現在ENCは、修士課程での取り組みに見られる教育面での活動同様、研究においても、デジタルデータの活用、いわゆる「デジタル人文学」を積極的に実践しています。ENCの取り組みの成果は、その一端がデータベースなどの形でウェブサイト上に公開されており、豊富な史資料研究のノウハウを生かした密度の濃い情報発信が行われています。ここではそのうち代表的な2つのコンテンツをご紹介します。

(1) Theleme (Techniques pour l'Historien en Ligne : Études, Manuels, Exercices) ¹²

写本、書物、文書資料などに関する研究・学習支援サイトで、特定テーマに関する手引き、参考文献一覧、古文書解読の練習問題などが含まれ、有用な学習ツールとして機能しています。



「Theleme」から古文書解読の練習問題例

(2) ELEC (Éditions en ligne de l'École des chartes) ¹³

一次資料のデジタル化画像・テキストなどの各種データベースです。「サン・ドニ ¹⁴ のラテン語年代記」

(古文書テキストの翻刻)、「ベルレー ¹⁵ の昇階曲集」(写本のデジタル画像)など、個別テーマに沿った25のコンテンツ(平成26年6月現在)が公開されています。

おわりに

本在外研究は、たいへん実りの多いものでした。直接的に実務に役立つ知識を得ることができただけでなく、フランスにおける文化遺産全般に対する意識の高さや行政の手厚さを肌で経験することができたのは、とりわけ大きな収穫でした。ENCのカリキュラムは、日本の図書館界から見ると学究的に過ぎる面もありますが、それが拠って立つ歴史的・文化的背景や哲学について知ることは、翻って日本の図書館のあり方を考える上で示唆に富むものでした。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださったENCおよび関係各位に心から感謝申し上げるとともに、今後、日仏の図書館関係者の交流が一層進展することを願っています。

(おおぬま たへえ 利用者サービス部音楽映像資料課)



¹² <http://theleme.enc.sorbonne.fr/>

¹³ <http://elec.enc.sorbonne.fr/>

¹⁴ パリ北部郊外の地名。その大聖堂はフランスの歴代王家の廟所として知られています。

¹⁵ スイス北部、ベルン州の地名。かつて大修道院が存在しました。

【参考文献】

●国立古文書学校ウェブサイト <http://www.enc.sorbonne.fr>

●Yves-Marie Bercé et al. (ed.) *L'École nationale des chartes*. Thionville: Klopp, 1997.〈当館未所蔵〉

●泉美知子『文化遺産としての中世』三元社 2013〈請求記号 K275-L71〉



国立国会図書館にない本 (続編)

戦前・占領期の雑誌を求めて

小林 昌樹

ころは、当館ホームページ内「人文リンク集」⁶に登録して、毎日のレファレンス回答に活用しています。けれども古い一般誌、大衆娯楽誌の場合、これらを参照しても見当たらないことが多くあるのです。

「国立国会図書館にない本 戦前から占領期の出版物」は、本誌2012年3月(612)号 pp.20-28をご覧ください。

○はじめに

「遡及入力」の達成¹やNDL-OPACの普及で利用者自身による検索が一般化したためでしょう、当館人文総合情報室のレファレンス・カウンターで聞かれる所蔵調査は「国立国会図書館にない本」など、難易度の高い質問の割合が増えています。当館未収の戦前期の雑誌などはその代表的なものです。

当館には戦前戦後を通じた法定納本等によって形成された巨大な一般コレクションがありますが、意外と古い雑誌が見当たらないのです。というのも、単行本はともかく、戦前雑誌の収集率はかなり低いのです(昭和13年市販雑誌分で推計約3割)²。

○他館の所蔵雑誌

おもに大学図書館が参加するCinii(サイニイ)³などの総合目録を検索しても、一般誌や大衆娯楽誌の場合は、見当たらないことが多くあります(明治新聞雑誌文庫⁴は雑誌のみCiniiに参加しています)。

日本近代文学館、大橋図書館⁵蔵書を継承した三康図書館など、雑誌の所蔵に特色がある機関で所蔵データベースを公開していると

○探訪の候補地

このような状況から古い一般雑誌コレクションは、国の蔵書(ナショナル・コレクション)として、当館の機能を補完してくれる重要な資料群といえます。そこで、戦前・占領期雑誌コレクションの現状調査をしてみようということになりました。

昨年度に初めてその目的で、近江八幡市立近江八幡図書館と同志社大学を探訪しましたが、滋賀大学の経済経営研究所⁷も候補でしたが、書庫新設の最中であつたためかありませんでした。

○「近江兄弟社図書館」(1940-1975)の雑誌

近江八幡市立近江八幡図書館に「近江兄弟社図書館」旧蔵書があると文献で知り、訪れたのは今年2月でした。毎日業務で使っている前述の「人文リンク集」(特に「蔵書検索・出版情報>雑誌」の項目)を見て気付いたのですが、私立の公共図書館の流れをくむ図書館には、戦前の一般雑誌が保存

近江八幡市立近江八幡図書館



1 カード目録、冊子目録など過去に作成した所蔵データを、さかのぼってデータベースに入力することです。国立国会図書館で所蔵する日本語の単行書については1999年に完了。

2 田中久徳「旧帝国図書館の和雑誌収集をめぐって」『参考書誌研究』1989年8月(36)号 (<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3051285>)

3 <http://ci.nii.ac.jp/books/>

4 東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター(明治新聞雑誌文庫)。明治大正期の新聞や雑誌を保存する専門図書館。

5 1902年創立、1953年廃止。東京都立日比谷図書館(当時)に匹敵した私立公共図書館。九段下にありました。

6 <http://rnavi.ndl.go.jp/humanities/jinbunlinks.php>

7 戦前の彦根高等商業学校収集資料を継承しており、外地の雑誌などに特色があります。



同志社大学新町キャンパス

されている傾向があるのです⁸。

レファレンス担当・伊藤亜希子氏の案内で閉架書庫（2F）に入庫し、近江兄弟社図書館の旧蔵書⁹を調査しました。雑誌については事前連絡時にリストを見せてもらっていましたが、目録作成作業中の図書¹⁰にも戦前の製本済み雑誌が含まれていることを確認できたのは実見の成果でした。また、近江兄弟社図書館の事務文書類（昭和10年代から30年代まで）が整理されて保存箱に入っているのを見たのも、望外の発見でした。

雑誌の多くは製本済みで、状態は良いものです（写真1）。聞けば、近江兄弟社図書館文書も含め、これらの資料のリスト¹¹は2010年代に滋賀県緊急雇用創出特別推進事業で入力されたとのこと。同様のいきさつがあれば、他館でもここ数年中に姿をあらわす資料群もあるかもしれないと期待がつのりました。



写真1

○「山本文庫」（カストリ雑誌¹²コレクション）

翌日の午前中には、京都市内の同志社大学

に伺いました。社会学部研究室事務室に所蔵されている、有名な「山本文庫」を調査するためです。このコレクションは同大教授だった山本明氏（1932-1999）が1970年代に収集しました¹³。

事務員の中島佳奈子氏に案内されて入った書庫は閲覧席もあり、立派に図書館施設と呼べるものでした。

1,300冊以上ある山本文庫はすべてタイトルごとに保存箱に入れられ、キャビネット（施設）3台に収納排架されていました。目録データは未公開かと思っていましたが、実は同志社大学のOPACやCiniiにもすべて公開しているとのこと。別にカード目録（おそらく1994年の寄贈受入れ時のもの）も確認しました。

ただし保存上の理由で利用は原則不可です（社会学部の教員のみ可）。特別に同文庫のうち代表的カストリ誌『獵奇』を閲覧したところ、保存状態は当館所蔵分などよりもむしろ良いことが見て取れました（写真2）。山本明氏が集めた際に生じた複本¹⁴も所蔵されています。



写真2



○新聞業界誌

事前に出納を頼んでいた新聞業界の専門誌も閲覧しました。戦前の業界紙・誌も、当館を含め全国的に残っていないジャンルのひとつです。

たとえば『新聞研究所報：日刊通信』（大正11年分）は簡易印刷の通信紙ですが（写真3）、残された書き込みから、戦前に新聞編集の現場で使用されたものを、戦後、同志社大学の新聞学専攻成立以降に収集したものであろうと考えられます。新聞紙面からはわからない新聞業界の裏面がわかる重要資料ですが、この時期のものはほかに東京大学大学院情報学環・学際情報学府にしか所蔵が確認できず、当館にも見当たりません。



写真3

○同志社大学 今出川図書館

午後はキャンパスを移って今出川図書館へ。司書の中島晴子氏に雑誌書庫を案内してもらいました。書庫にある雑誌バックナンバーはすべて製本されNDC（日本十進分類）順に開架で排架されており、学部生も含め自

由にアクセスできて便利そうです。ここには図書館学の先達・竹林熊彦氏¹⁵（1888-1960）が集めた図書館史のコレクション「竹林文庫」もあります。明治末の新聞切抜きスクラップ帳（写真4）が圧巻でした。



国立国会図書館の人文課では現在、所管する出版関係のコレクション「布川文庫」¹⁶の利活用法を模索しています。この文庫は出版界で広く活躍した布川角左衛門氏（1901-1996）が出版資料館構想のもとに集めたもので、出版業界の専門誌や、一般雑誌の創刊号なども含まれています。このコレクションを起点とし、今後の資料探訪の知見もあわせればいつの日か、戦前の帝国図書館がとりこぼしたものを含む日本出版物の全体を見渡すことができるようになるかもしれません。その日まで探訪は続きます。

（利用者サービス部人文課

こばやし まさき）

8 理由はこれからの研究課題です。私立公共図書館史については、次の文献があります。「特集 実業家が創設した公共図書館の設立理念の研究」『大倉山論集』2009年3月（55）号

9 近江兄弟社の発行した機関誌『湖畔の声』（1912～）などキリスト教関係誌、『新潮』『暮らしの手帖』『音楽の友』など一般誌などが残されています。

10 図書館では一般に単行本（書籍）を「図書」と呼んで、逐次刊行物（新聞、雑誌）と別枠で管理します。この図書群には「滋賀県蒲生郡教育会戦時記念文庫」（1904-1935）旧蔵書なども含まれていました。

11 表計算ソフトの形式でした。公開へむけて準備中とのことです。

12 終戦直後数年間に流行した大衆向け娯楽誌のこと。扇情的なカラーの表紙が特徴です。

13 山本明『カストリ雑誌研究：シンボルにみる風俗史』（中央公論社、1998）

14 平穏期の流通と異なり、戦後混乱期の非正規的なメディアなので、複本に残る価格訂正の痕跡などから、あとで投げ売りされたなど、その流通形態がわかることがあります。

15 同志社専門学校文科を卒業後、西洋史研究を志すも、図書館員の道へ。九州帝大、京都帝大で司書官を歴任。戦後は天理大学講師などをつとめました。

16 http://navi.ndl.go.jp/research_guide/entry/theme-honbun-100040.php 本誌3ページもご覧ください。



世界図書館紀行

カナダ議会図書館

大迫 文志

筆者は、2013年8月から現在までカナダに滞在し、ケベック州モントリオールのマギル大学比較法研究所において長期在外研究を行っている。本稿では、これまでの滞在期間中に訪問したカナダの図書館のうち、特に長い歴史をもつカナダ議会図書館についてご紹介したい。



議会図書館本部棟

カナダ議会図書館は、カナダ連邦議会に附属する機関であり、首都オタワ（オンタリオ州）に所在している。オタワには連邦議会のほか、最高裁判所、中央行政省といった連邦の主要機関が集中しているが、カナダ最大の都市トロントや、それに次ぐ規模のモントリオールと比べると、人口88万人程度の小規模な街である。トロントを州都とするオンタリオ州と、モントリオールのあるケベック州（州都はケベックシティ）のちょうど境界に位置しており、州境となっているオタワ川を越えれば、そこはケベック州ガティノーである。

カナダ連邦議会議事堂は、オタワ川沿いのパラメントヒルと呼ばれる丘の上に建てられており、首都を象徴する建築物だといえる。世界中から訪れる観光客を対象とするガイドツアーが連日催行されており、誰でも議事堂内部を観覧することができる。そして、このツアーにおいて「議事堂を構成する棟の中で最も長い歴史を誇るとともに、カナダのあらゆる建築物の中で最も美しいもののひとつ」として案内されるのが、カナダ議会図書館（本館）である。まずはこの建物の紹介からはじめたい。

この図書館は、複数の候補者の中から選ばれたイギリス人トーマス・フラー（Thomas Fuller）とカナダ人キリオン・ジョーンズ（Chilion Jones）という二人の建築家によって設計され、1859年から1876年に建設された。当時のヴィクトリア朝イギリスで流行していたイタリアン・ゴシック様式が採用されている。1857年に建設されていた大英博物館の図書室を模したといわれるドーム状の構造で、その直径は120フィート（約36.6メートル）、天井までの高さは160フィート（約48.8メートル）である。外から見ると、等間

隔に控え壁、小尖塔、そして装飾窓が配置された16角錐となっている。

内部にも数多くの装飾がちりばめられている。異なる色合いの木材（チェリー、オーク、ウォルナット）を組み合わせ、幾何学的模様を描き出した床のほか、壁や本棚の側面には、神話上の動物、仮面、花など数百もの彫刻が施されている。そしてドームの中央には、白大理石を削り出して造られた、若かりし頃のヴィクトリア女王の像が立っている。

図書館棟は、何重にも仕切られた回廊を通して議事堂本体とつながっている。イギリスのソールズベリやウェルズなど中世のカトリック大聖堂に見られるチャプターハウス（聖職者の会議場）に似たこの造りは、初代図書館長アルフェウス・トッド（Alpheus Todd）が考えたといわれる防火対策の一環だった。そして実際に、貴重な蔵書を火災から守り抜くことになった。

第一次世界大戦中の1916年2月3日、議事堂本体部分から出火。火元は読書室に置かれたごみ箱に投げ込まれた煙草だといわれている。読書室の雑誌や新聞、木造の内装に飛び火して勢いを強め、議会が開会中



カナダ連邦議会議事堂とカナダ議会図書館（本館）



だったにもかかわらず、ついに議事堂本体は全焼してしまった。一方、図書館棟では職員がとっさの判断で回廊にある鉄の扉をすべて閉めるよう指示し、火の侵入を食い止めた。このとき強い北風が吹いていたことも幸いし、議事堂の北側に位置する議会図書館は、歴史的な大火災に唯一耐え抜くことができた。

こうして、議会図書館は1876年以来同じ場所で現在まで活動を続けている。しかし、議会図書館の歴史はカナダの議会史に深く関わるものであり、さらに古くさかのぼることができる。そこで次に、カナダ議会史を概略しつつ、議会図書館の起源をたどることしたい。

歴史

イギリスの植民地であったカナダに立法議会が置かれたのは、1791年のことである。もともとはフランスが形成した植民地（ヌーヴェルフランス）を、イギリスがフレンチ・インディアン戦争（1759年～1760年）に勝利して征服し、1763年のパリ条約によりケベック植民地としてイギリスが獲得した。当時、イギリス本国では1689年の権利章典に

よって国王に対する議会の優位が認められ、すでに議会制民主主義が確立していた。しかし、フランス系住民が大多数のケベック植民地において議会を招集すれば、フランス系住民代表が議会の多数派となることが予想された。このため、1774年のケベック法により、植民地における立法権は、国王が任命する立法参事会が行使することとなった。一方で、イギリス本国の法制度であるコモンローの代わりに、民法やパリの慣習法をはじめとするフランス植民地時代の法制度が一部そのまま維持された。

イギリス系住民はこの状況に不満を持ち、議会の設置とコモンローの適用を本国に要求した。その結果、1791年にケベック植民地はイギリス系住民の多いアッパーカナダ（おおむね現在のオンタリオ州）とフランス系住民の多いローワーカナダ（同じく現在のケベック州）に分けられ、それぞれに立法議会が置かれた。立法には植民地総督の承認が必要であるものの、立法議会（下院）は立法参事会（上院）と並んで立法権を行使できるようになった。ローワーカナダでは引き続きフランスの私法が適用された。余談になるが、ケベック州では今もなおナポレオン民法典の流れを汲む民法典が適用されており、公法に

ドーム中央のヴィクトリア女王の像。レファレンスカウンターが取り囲む。周囲一面、資料が排されている。





についてはコモンローが、私法についてはシビルロー（市民法）が適用されるという独特の法制度を維持している。

議会設立に伴い、議会図書館が両植民地で整備された。ローワーカナダでは、1792年に首都ケベックシティで初の立法議会が開かれ、「カナダ人の代表の利用に供するため」設立された図書館の管理人が任命されている。年報の作成が管理人に義務付けられており、高価な写本を含む約1,000冊の蔵書を管理していたことが1817年の年報に記録されている。一方のアッパーカナダでは、議員の寄贈による蔵書が議会において管理されていたようだが、1813年に首都ヨーク（現在のトロント）におけるアメリカ軍の焼き討ちにより議事堂が焼失した。このため、失われた蔵書に代わる図書館設立の予算800ポンドが、1816年に立法議会において決議されている。また1836年には、後に初代連邦議会図書館長となるトッドが、15歳という若さで館長助手に任命されている。

1841年、イギリス系住民とフランス系住民の対立を解消すべく、両植民地は統合され、カナダ植民州が形成された。それぞれの立法議会も立法参事会とともに統合され、議会図書館もまた統合された。しかし、1849

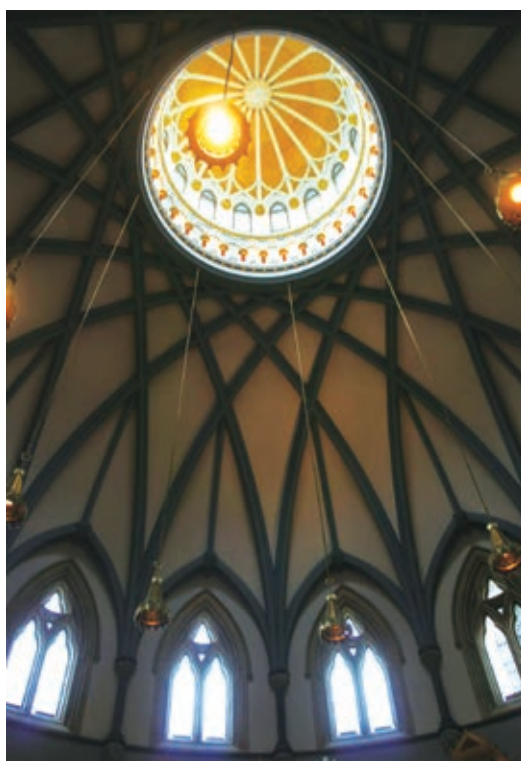
略年表

- 16世紀半ば～ フランスがカナダを植民地化。
- 1763 パリ条約により、ケベック植民地としてイギリスが獲得。
- 1774 ケベック法により、立法権は国王が任命する立法参事会が行行使することになる。
- 1791 アッパーカナダとローワーカナダに分かれ、それぞれに立法議会が置かれる。
- 1841 両植民地統合、カナダ植民州となり、立法議会、立法参事会が統合される。
- 1857 首都がオタワに決定。
- 1867 英領北アメリカ法が発効、カナダ自治領となる。
- 1876 現在の議会図書館が完成。

年までは蔵書を一元的に管理する施設が整わず、引き続き別々に蔵書を管理していた。ようやく当時の首都モントリオールに蔵書が集められた数ヶ月後、フランス系住民の反乱による損害の補償をめぐる法案の扱いに激怒したイギリス系住民が暴徒化して議事堂に放火し、約25,000冊の蔵書は約200冊を除いて焼失してしまった。1854年にも当時の首都ケベックシティでの火災により、約17,000冊の蔵書の半数以上が失われている。しかし、議会図書館は度重なる火災にめげることなく、ヨーロッパから書籍を買い付けて蔵書の回復に努めてきた。

その後もイギリス系住民とフランス系住民の対立は解消されず、短期間のうちに大都市の間で遷都が繰り返された。そこで1857年に恒久的な首都をヴィクトリア女王が自ら決定することになり、イギリス系住民とフランス系住民の勢力の中間に位置し、かつ当時の

(左) 装飾の施された書棚に排された開架資料
(中) 建物内側から眺めるドーム構造
(右) 図書館棟と議事堂をつなぐ扉



仮想敵国であったアメリカとの国境から距離のあるオタワが選ばれた。さらに1867年には現在のカナダ憲法の一部を構成する英領北アメリカ法が発効し、カナダ植民州はカナダ自治領となり、総督の承認を必要としない立法権を手に入れた。この間、議会議事堂及び図書館の建設がはじまり、1876年に現在の議会図書館が完成した。この時の蔵書は83,883冊であった。

その後の歴史については、簡単にとどめておきたい。議会図書館は、我が国の国立国会図書館とは異なり、議員や議会スタッフだけが利用することができる。1956年には議会図書館が議事堂本体にある閲覧室の運営も行うようになり、議員のために新聞や雑誌を閲覧に供している。一般国民のための国立図書館（現在は国立図書館及び公文書館）の完成は1958年のことであった。これに伴い、いくつかの貴重書が議会図書館から国立図書館に移管された。また、国立国会図書館（日本）の「調査及び立法考査局」に相当する議会の調査部門が、1965年に設立された。

以上のような議会図書館の歴史の流れは、近年になってさらに加速し、大きく変化しているようである。次に、最近の議会図書館の動向について紹介したい。

(左) 古い銀行の建物を利用した新館の外観
(中) 内部の様子。高さのあるフロアを区切って書庫を設けている。
(右) 高い天井を利用して作られた書架



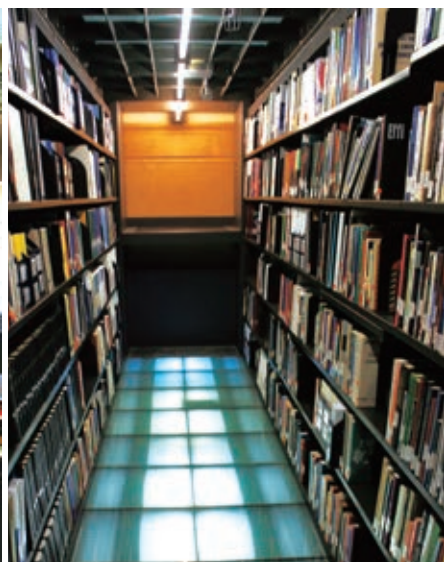
近年の動向

まず、蔵書の増大と調査部門に対する需要

の高まりによって、既存の施設だけでは十分なサービスを提供することが難しくなってきたことが課題として挙げられる。さらに、19世紀に建築された議会図書館本部棟の改修も必要となった。このため、2002年に、議事堂の外に新たな図書館を設立することとなった。とはいえ、議事堂の周りは既に街が発展しており、もはや新たな建築物を造る余地はなかった。そこで、議事堂から数ブロック離れたところにある銀行の施設を改造し、図書館に転用することにしたのである。この新館では、高さのあるホールを区切って5層の書庫を造り出す等の工夫がなされている。地下には分厚い扉に守られた大金庫がそのまま残っており、職員のためのキッチンや資料置き場として使われている。この他にも、いくつかの小規模な分館が、既存の建物を間借りして設立されているという。

新たな図書館の設立にあわせて、本部棟の大規模改修も行われた。施設の現代化が行われ、温度や湿度を一定に管理するシステムが初めて導入された。また、書庫スペースを確保するため、本部棟の地下をさらに約9メートル掘り下げ、地下書庫を増設した。そしてヴィクトリア女王像をはじめとする芸術的な装飾は、1,200人を超える職人や技師たちの手によって修復された。これらの改修は、2002年から2006年にかけて実施された。

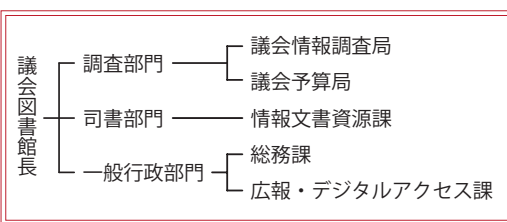
新たな図書館施設を得て、議会図書館の機能は再編成された。もともと図書館司書はみ





な本部棟で執務していたが、現在はカウンター業務を除き、司書は新館に机を構えている。これにより本部棟に余裕ができ、閲覧スペースとして使われるようになった。これに伴い、議事堂本体の閲覧室は委員会会議室に転用され、現在は議会図書館の管轄外となっている。本部棟と新館では利用頻度や資料の継続性を考慮しつつ蔵書の分配が行われ、実用的な資料については新館に移送された。他方、過去に出版された図書や、古くから継続的に発行されている予算書や法令集は、引き続き本部棟に配架されている。このように新館は、第二の本館として活用されている。その他の組織再編として、議員及び公衆に対する認知度を向上させるとともに、資料のデジタル化とオンラインでのアクセスを改善するため、これまで各分野別に展開されてきた広報担当と電子化技術担当が統合された。議事堂内のガイドツアーは、この部署が担当しており、2012年にはのべ324,050人を案内している。また、調査部門には、連邦財政を連邦議会独自の立場で分析する専門職として議会予算局が2006年に設置されたばかりである。

今後も再編は続くと思われるが、さしあたり2013年時点の議会図書館の組織は次のとおりである。



職員数はフルタイム換算で340人、予算は44,427,951カナダドル（約41億8千万円）で、このうち37,695,803カナダドル（約35億4千万円）が人件費である。

このように急速な変化の先にある議会図書館のビジョンは、「議会に重宝され、信頼される情報と知識の供給源たること」である。従来は必要な書籍を揃えて議員に閲覧させる



(上) 金庫の中がキッチンに転用されている。
(中) 新館の執務室
(下) 議事堂本体にあった閲覧室。委員会会議室として再利用されている。

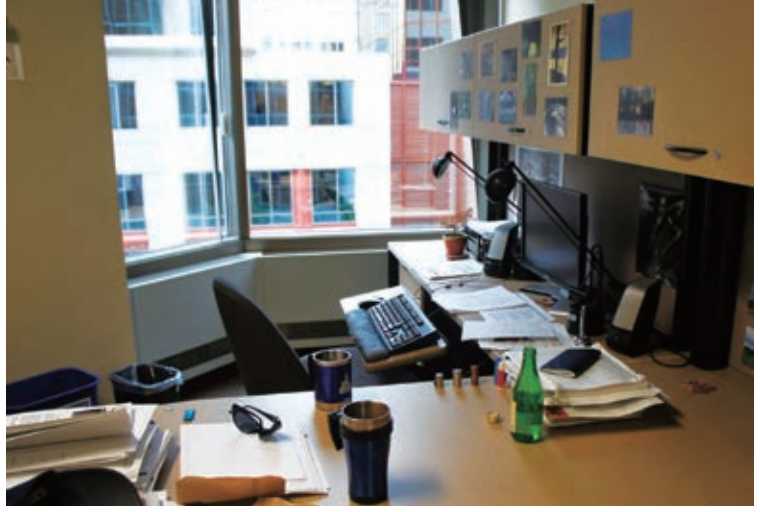
ことができれば足りた。しかし多くの情報と知識があふれかえっている現在では、議員の求めるものを適切に選び出し、客観的な分析を加えて迅速に提供することまでも求められている。そのような機能を果たしているのが、調査部門に属する議会情報調査局である。あまり公衆には知られていない彼らの仕事について、最後に紹介しておきたい。

調査部門

議会情報調査局は、2000年頃から議事堂に近接するオフィスビルに間借りしている。法律学や経済学などの専門教育を受けたアナリストを中心とする約100名が、個室を与えられて執務している。

連邦議会の議員や委員会から調査の依頼が

(左) 議会調査情報局が入居するオフィスビル
(右) アナリストの執務室



あると、各分野のアナリストを統括するリーダーが受理し、各アナリストの専門分野や忙しさを考慮して、誰に調査を担当させるかを決め、調査に当たらせる。各アナリストには携帯電話が支給されており、依頼者と直接相談しながら、図書館資料、オンライン資料等を駆使して調査回答を作成していく。2012年には、上院議員から323件、上院委員会から595件、下院議員から2,056件、下院委員会から970件、両院合同委員会から558件、その他秘書等関係者から449件の調査依頼があった。

文書や面談による回答のほか、アナリストは自分の担当する両院の委員会に出席し、委員に説明を求められた場合には、問題となっている事項について、背景や基礎的な事実を説明する機会がある。このため、関係する委員会に属する議員との関わりが強くなっている。筆者が議事堂内の食堂でアナリストと会食した際、通りがかった多くの人々を紹介してもらったが、同僚だけでなく議員も含まれていた。文化の違いもあると思うが、議員とアナリストが分け隔てなく、親しげな付き合いをしているように見えたのが印象的であった。

調査の依頼がなくとも、重要な政策などについては議会情報調査局が自発的にセミナーを開催し、議員に情報提供を行っている。2012年には35回のセミナーが開催され、1,168人が参加した。また、アナリストは自分の専門分野について、調査の合間をぬって随時レポートを作成し、公表している。

このように議会情報調査局の業務は、国立国会図書館の調査及び立法考査局と重なり合うところが多い。両院にもそれぞれ調査部門は置かれているが、各院の規則、先例についての調査が主な業務とされているようであり、政策的、学術的な調査はもっぱら議会図書館が担当しているという。

おわりに

図書館の財政事情はカナダにおいても厳しく、多くの政府図書館が閉鎖され、国立図書館及び公文書館が図書館間貸出し制度を停止する等、図書館機能の見直しが行われている。このため、議会図書館に対する他機関からの資料の問い合わせが増加しているという。議会図書館もまた、限られた資源を有効に活用するために不断の努力を続けている。そのような中でも、歴史ある本部棟の改修はていねいに行われ、文化的価値が維持されている。図書館にとって大切なものは何かを考える上で、示唆に富む態度のように思われた。

(総務部人事課 おおさこ たけし)

謝辞 カナダ議会図書館見学にあたり、連邦議会上席法律顧問のGregory Tardi博士ならびに議会図書館アナリストのMs Dara LithwickおよびMr Andre Barnesにご案内いただき、多くの情報提供を受けた。ここに感謝申し上げます。

参考文献

- Kenneth Binks, *Library of Parliament: CANADA* (Canada: KCB Publications, 1979)
- *Library of Parliament, Annual Report 2012-2013: Access, Outreach, Modernization.*
<http://www.parl.gc.ca/About/Library/VirtualLibrary/AnnualReport/2013/pdf/annualreport_2012-2013-e.pdf>
- 松井茂記『カナダの憲法：多文化主義の国のかたち』(岩波書店, 2012)
- 木村和男ほか『カナダの歴史：大英帝国の忠誠な長女：1713-1982』(刀水書房, 1997)
- 能見善久『ケベックにおけるフランス民法典』北村一郎編『フランス民法典の200年』(有斐閣, 2006年) pp.90-116
- カナダ議会図書館ウェブサイト <<http://www.parl.gc.ca/About/Library/VirtualLibrary/index-e.asp>>

地図を探すための地図

国立国会図書館には、特定分野の資料を専門に取り扱う資料室があります。その一つの「地図室」では、明治期以降の国内外の一枚ものの地図や住宅地図などを取り扱っています。

当館が所蔵する地図は、一部の海外の地図を除いて、NDL-OPACで検索することができますが、地図のタイトル（図名）が分からないと見つけれられません。そのため、例えば、「中国の中洞周辺の地形図が見たい」というように、地名や地域名は分かっているが、正確な図名が分からない場合、そのエリアが地形図のどの一枚に含まれるか、特定することは困難です。そこで、その手助けになるのが「索引図」です。索引図とは、特定の地図を素早く見つけ出せるよう、一定の方式に従って作成された地図であり、いわば、「地図を探すための地図」なのです。

地図室では、主に、世界各国の地形図、外邦図（戦前に旧陸軍参謀本部陸地測量部が作成した満州、中国、東南アジアなどの地図）について、それぞれの索引図を、国ごと、かつ、縮尺ごとに作成しています。その作成は、パソコン上で画像編集ソフトを用いて、地図情報をベースとなる図面（元図）に記載するという方式で行っています。具体的には、元図上に、当館所蔵の各地図の範囲を直線で囲み、その囲み枠を色付けし、その中に地図番号や図名などの地図



情報を記入します。パソコンでの作業ではありますが、経緯度による歪みなどにより、枠を直線で引けないこともあります。その場合、記載する地図の内容にできるだけ沿うよう、含まれる都市を確認したり、山・川・海岸線などがどこまで図郭に入っているかを見定めながら、修正を重ねて索引図を作成しています。

こうして完成した索引図は、細かく格子状に区画され、区画ごとに、地図番号と図名が元図の情報（都市、山、川など）とともに示されています。これにより、探したい地図を、視覚的に特定することが可能です。前述の例「中洞周辺の地形図」の場合、索引図「中華人民共和国 1:250,000 地形図」（上図）から、中洞付近が地図番号 309「Yu-p'ing」と分かれます。

このような索引図については、リサーチ・ナビ「地図をさがす」で公開していますので、是非アクセスしてみてください、あなたのお探し物の一助となれば幸いです。

（人文課地図係 ニゲラ）

本屋にない本

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

図録桐生からくり人形芝居

桐生からくり人形芝居保存会図録制作委員会 編
桐生からくり人形芝居保存会 2011.12 104p 30cm
<請求記号 KD611-J15 >

必ず主の仇を取る一決意を胸に前を見据える、あふれる想いを秘めたその静謐なまなざしが、観る者の心を打つ。表紙を飾るのは大石内蔵助、『忠臣蔵』の義士討ち入りの一場面である。一瞬、生きているか見紛うほどの表情をたたえているが、実はからくり人形。人間の表情を精巧に模した「活き人形」を使った芝居が、群馬県桐生市で行われている。

本書は桐生からくり人形芝居館に収められた人形の図録である。貴重なからくり人形の写真に加え、再現された人形と舞台の仕組みが解説されており、保存会の活動のあゆみとからくり人形への情熱を窺い知ることができる。

からくり人形芝居は、桐生天満宮御開帳の際の見世物として昭和初期に隆盛を極めた。昭和36年を最後に一度は途絶えたが、桐生市民宅の蔵に眠っていた人形が専門家の目に留まったのをきっかけに、再興の機運が高まる。江戸時代のからくり人形師、竹田近江の系譜を継いでおり、国立科学博物館の鈴木一義氏から「からくり芝居に使われた人形で現存するのはここだけだ。(中略)素晴らしい江戸時代の技術と文化を伝えるもの」と高く評価された。

こうした声を受け、桐生からくり人形芝居保存会が結成され、人形芝居は平成11年に復活した。公演の際には保存会が再現した人形を使用し、現在では芝居館での月1回の公演のほか、県内外への出張公演もこなす。

図録には、昭和初期に使われていた人形の写真が演目ごとに収められている。そこには権を構え、恐ろしいまでの気迫で顔をゆがませる宮本武蔵と、鞘を捨て武蔵と対峙する凛とした顔つきの佐々木小次郎など表情豊かな

人形たちが並ぶ。年代によって当時の俳優や歌手に似せて作ってあるのも面白い。三保の松原伝説をもとにした『羽衣』の天女2体は、戦後活躍した歌手の朝倉ユリとコロムビア・ローズがモデルであり、現代風の大きな目と鼻筋の通った顔立ちが印象的だ。

人形の表情もさることながら、着物をはじめ天女の羽衣や鎧兜、小物も驚くほど細やかに作られている。着物はさすが織物の町桐生といふべきか。刀は鞘から抜けるように作られている。劇中で刀を抜くことはないにもかかわらず、鞘に納める時にかちやりと音までするという。

図録にはまた、残された人形から再現したからくりの図面も掲載し、専門的な見地からその構造に解説を加えている。後世の人たちがからくりを復元できるようにとの配慮によるものだ。

特筆すべきは図録制作への保存会の熱意である。制作決定から構成、写真、装丁までを会員が手掛けた。貴重な文化財を受け継いでいこうとする地元の人々の情熱が詰まった一冊。人形たちの精緻な作りを見るだけでも一見の価値があるだろう。

(総務部人事課 田村 祐子)



お知らせ

■ 東京本館の資料の一部を関西館へ移送するため、資料の利用を一時休止します

9月から、東京本館の資料の一部を関西館へ移送します。移送する資料の種類とそのご利用については下表をご覧ください。

資料の移送は、日々増え続ける資料を適切な環境で保存し、書庫の有効な利用をはかることを目的として行います。利用者の皆様にはご不便をおかけいたしますが、ご理解とご協力をお願いいたします。

○移送作業期間 平成26年9月～平成27年2月末（予定）

○移送する資料とその利用。

種類と数量	移送作業期間中	移送後
デジタル化済みの和漢書の原本 約39万冊 ①昭和25年9月から昭和43年3月までに整理されたもの ②戦前期刊行のもの ③古典籍資料室で所蔵する近代刊行資料の一部	ご利用になれません。	原本は、調査・研究のため特に必要がある場合、展示会への貸出しに限り、関西館でご利用いただけます。 *ご利用の際は申請が必要です。 *東京本館に取り寄せてご利用いただくことはできません。 デジタルデータをご利用いただけます。
④中国語・朝鮮語図書（昭和60年までに整理されたもの） 約6万冊	ご利用になれません。	関西館でご利用いただけます。 *展示会への貸出しには申請が必要です。 *展示会への貸出しを除き、東京本館に取り寄せてご利用いただけます。

○問合せ先

（平成27年2月末日まで） 03-3581-2331（大代表）

①②④の資料：利用者サービス部 図書館資料整備課

③の資料：利用者サービス部 人文課

（平成27年3月以降） 0774-98-1200（関西館代表・自動音声）

①②③の資料：関西館 文献提供課

④の資料：関西館 アジア情報課



お知らせ

■ 利用者登録についての アンケートご協力をお願い

国立国会図書館では、利用者の皆様へのより良いサービスの提供をめざして、利用者登録についてのアンケートを実施しています。登録利用者の方から、これまで国立国会図書館を利用したことのない方まで、広く皆様のご意見をお聞かせください。アンケート結果は、今後のサービスや業務の改善に役立てられます。ご協力をお願いします。

○アンケートページ

国立国会図書館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>)

>国立国会図書館について>利用者アンケート

URL <http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/enquete/index.html>

○NDL-OPAC（国立国会図書館蔵書検索・申込システム <http://ndlopac.ndl.go.jp/>）のトップページからもアンケートページに移動できます。

○館内の利用者端末からもアンケートページに移動できます。

○実施期間 7月1日（火）～8月31日（日）

○問合せ先

国立国会図書館 利用者サービス部 サービス企画課

03-3581-2331（大代表）

お知らせ

■ 本の万華鏡（第16回） 「日本近代建築の夜明け ～建築設計競技を中心に」



6月24日からミニ電子展示「本の万華鏡」第16回「日本近代建築の夜明け～建築設計競技を中心に」の提供を開始しました。

明治時代になると、ジョサイア・コンドルなどのお雇い外国人から西洋の専門的な建築教育を受けた日本人建築家が誕生し、近代建築物が建てられるようになりました。明治末期には建築設計競技（コンペ）が導入され、建築家たちがしのぎを削る場となり、それにまつわる様々なエピソードも生まれます。また、街中に現れる近代建築物は徐々に名所として認識されていきました。その中には国会議事堂や大阪市中央公会堂のように、今なお活用されている建物もあります。

第1章では、近代建築の基礎を築いた人々と、彼らが学んだ工部大学校の教育について紹介します。第2章では、4つの建築設計競技とそのエピソードを取り上げます。第3章では、名所となった近代建築が掲載された名所案内や写真集をご覧ください。

○URL <http://www.ndl.go.jp/kaleido/entry/16/index.html>



写真1 国会議事堂建築設計競技の1等当選図案
洪洋社 編『議院建築意匠設計競技図集』
洪洋社、大正9



写真2 実際に建築された国会議事堂
宮繕管財局 編纂『帝国議事堂
建築の概要』
大蔵省宮繕管財局、1936



写真3 大阪市公会堂建築設計競技の1等当選図案
[大阪市]公会堂建設事務所 編『大阪市公
会堂新築設計指名懸賞競技応募図案』
公会堂建設事務所、[大正2]



写真4 実際に建築された大阪市公会堂
建築学会 編『明治大正建築写真聚覧』
建築学会、昭和11

お知らせ

■ 関西館小展示（第16回） 「宇宙に夢中—古代の宇宙観 から「はやぶさ」まで—」

第16回の関西館小展示では「宇宙に夢中—古代の宇宙観から「はやぶさ」まで—」と題して、古代の人々の宇宙観や人類初の月面着陸の記事、SF小説など、宇宙に関する様々な資料約70点をトピックごとに展示しています。

科学技術の発達とともに私たちの宇宙への関わり方は変わってきましたが、今なお宇宙は私たちを魅了してやみません。古代から現代に至るまでに様々な形で築かれてきた、私たち人間と宇宙の関係をご覧ください。

また、関連イベントとして、講演会を開催します。和歌山大学宇宙教育研究所所長の秋山演亮氏をお招きして、ペンシルロケットに始まり、はやぶさなどの輝かしい歴史を持つ日本の宇宙開発について解説していただきます。

- 開催期間 7月17日（木）～ 9月16日（火）
（日曜日、国民の祝日、8月20日（水）を除く）
- 開催時間 10:00～18:00
- 場 所 関西館 地下1階閲覧室
- 入 場 無料



第15回小展示の様子（第16回は展示場所を変更しています）

お知らせ

○展示資料例



『視実等象儀記：一名・天地共和儀記。初篇』（藤田古梅、1877年）
視実等象儀とは、須弥山を中心に世界が広がる仏教的宇宙観をモデル化したものです。本書はその解説書で、その写生画とともに各部の名称などが記されています。



『支那天文学』（巖々堂、1896年）
中国古代の代表的な宇宙観についての解説書です。半球形の天が地を覆っているとする蓋天説や、卵形の天の中心に卵黄のように地が浮かぶとする渾天説、天には実体がなく空虚であるとする宣夜説などについてまとめられています。



『九十七時二十分間月世界旅行』（三木佐助、1886年）
SFの古典として知られる、ジュール・ヴェルヌ原作の長編小説です。力強い独特の文体に、銅版画の挿絵がみられます。物語では、巨大な砲弾に乗って月を周回した後、地球に帰還します。

関連講演会

「日本の宇宙開発の過去と未来」 8月9日（土）14:00～16:00

ペンシルロケットに始まりはやぶさ等の輝かしい歴史を持つ日本の宇宙開発は、現在、大きな曲がり角にあります。秋山演亮氏（和歌山大学宇宙教育研究所所長）を講師に迎え、これからの日本の進む方向性に関して解説します。
※講演終了後、小展示の見学会があります。



- 会場 関西館 大会議室
- 定員 70名 ※定員に達し次第受付を終了します。
- 入場 無料
- 申込方法 次の事項を記載の上、電子メールまたはFAXでお申し込みください。
 - ①件名「小展示講演会申込み」、②氏名（よみがな）、③電話番号（日中のご連絡先）、④FAX番号（FAXでお申込みの場合のみ）
- 電子メール k-tenji@ndl.go.jp FAX 0774 (94) 9115
- 問合せ先 国立国会図書館 関西館 図書館協力課
電話 0774 (98) 1446（直通）

- 講師 秋山 演亮 氏
（和歌山大学宇宙教育研究所所長／特任教授）
1994年に京都大学農学部林産工学科を卒業。西松建設株式会社技術研究所に勤務し、“はやぶさ”小天体探査計画や“SELENE（かぐや）”月探査計画に参加。秋田大学専任助教等を経て2010年から現職。2013年から文部科学省宇宙科学小委員会委員を務める。



お知らせ

■ 国立国会図書館データベースフォーラム—遺跡研究から見る図書館とデータベース—（関西館）

「国立国会図書館データベースフォーラム」は、国立国会図書館の作成する様々なデータベースを紹介する催しで、毎年、東京本館と関西館で開催しています。今年、関西館においては、当館のデータベースをより具体的に理解いただけるように、遺跡研究を切り口にして、その活用方法などをご紹介します。

フォーラム終了後には、希望者を対象に館内見学会を実施します（事前申込みが必要です）。ご関心をお持ちの皆様のご参加をお待ちしています。

- 日 時 9月17日（水）【休館日】 13:30～16:30
*館内見学はフォーラム終了後16:40～（30分程度）
- 会場 国立国会図書館 関西館 大会議室
（京都府相楽郡精華町精華台8-1-3）
- プログラム イントロダクション
基調報告「遺跡の調査・研究とデータベース」
森本晋氏（奈良文化財研究所文化財情報研究室長）
プレゼンテーション
ディスカッション
- 定員 300名（館内見学会は100名）※先着順
- 参加費 無料
- 申込方法 ホームページ上の「データベースフォーラム参加申込みページ」からお申し込みください。7月23日（水）から受付を開始します。
国立国会図書館ホームページ（<http://www.ndl.go.jp/>）
>イベント・展示会情報>国立国会図書館データベースフォーラム
URL <http://www.ndl.go.jp/jp/event/events/dbf2014.html>
- 問合せ先
国立国会図書館 関西館 総務課
電話 0774（98）1247（直通）

※東京本館では10月30日（木）に開催を予定しています。詳細は本誌9月号でお知らせする予定です。



お知らせ

■ 平成26年度 資料デジタル化研修

公共図書館等における資料のデジタル化事業の支援を目的に、次のとおり平成26年度資料デジタル化研修を実施します。すでに資料のデジタル化事業を行っている図書館、またはこれから資料のデジタル化事業を行う具体的な計画がある図書館の職員を主な対象に、国立国会図書館での実例を交えつつ、資料のデジタル化事業の進め方およびデジタル化資料の利活用についての研修を行います。

- 日 時 10月23日（木）、24日（金）
- 会 場 関西館 第2研修室
- 対 象 公共図書館の職員（図書館以外の機関に所属する地方公共団体職員を含む）等で、資料デジタル化を担当する者（予定を含む）。
*受講者には、事前に課題を課します。
- 定 員 24名。1機関からの参加は原則として1名。応募多数の場合、公共図書館からの申込みを優先したうえで、抽選を行います。
- 内 容 次の2点を目指します。
(1) 資料のデジタル化を検討する上で踏まえるべき観点や実務上の留意点、技術などについて理解を深める。
(2) デジタル化した資料の提供、利活用に当たっての課題を共有し、解決のためのヒントを得る。
- 講 師 福島 幸宏 氏（京都府立総合資料館庶務課新館担当）、当館関西館電子図書館課職員。
- 参 加 費 無料。ただし、旅費・滞在費等は受講者の負担とします。
- 申込方法 ホームページにリンクしている申込みフォーム から、必要事項を入力の上、8月15日（金）17時までにお申し込みください。
- 問合せ先 国立国会図書館 関西館 図書館協力課 研修交流係
電子メール training@ndl.go.jp
電話 0774（98）1446（直通） 担当：高橋、飯島

※ 申込みフォームおよび研修内容の詳細は、ホームページをご覧ください。

国立国会図書館ホームページ>図書館員の方へ>図書館員の研修>平成26年度の研修>平成26年度資料デジタル化研修のご案内

URL http://www.ndl.go.jp/jp/library/training/guide/1206244_1485.html

お知らせ

■ 国際子ども図書館展示会 「世界のバリアフリー絵本展 2013—国際児童図書評議会 2013年推薦図書展」



2011年展の様子

国際子ども図書館では、7月29日から「世界のバリアフリー絵本展2013—国際児童図書評議会2013年推薦図書展」を日本国際児童図書評議会（JBBY）との共催で開催します。障害をもつ子どものために作られた、世界各国の先進的なバリアフリー絵本について知り、障害をもつ子どもへの理解を深めることを目的としています。

国際児童図書評議会（IBBY）障害児図書資料センターが世界23か国から選定した推薦図書60作品を手にとりご自由にご覧いただけます。点字や手話付きの絵本をはじめ、手で動かすことができる立体的な布絵本、障害への理解を深めるための本など、さまざまな資料を展示し、視覚だけではなく聴覚・触覚を使って読書を楽しんでいただくことができます。

障害をもつ子どもだけでなく、赤ちゃん、読書が苦手な子どもから大人まで、どなたでも楽しむことができます。

皆様のご来場をお待ちしています。

○問合せ先

国立国会図書館 国際子ども図書館 企画協力課

電話 03 (3827) 2053 (代表)

開催期間 7月29日（火）～8月24日（日）

休館日 月曜日、8月20日（水）

開催時間 9:30～17:00

会場 国際子ども図書館3階ホール

入場 無料

お知らせ

■ シリーズ・いま、世界の 子どもの本は？（第8回） 「いま、スペイン語圏の 子どもの本は？」



宇野和美氏

国際子ども図書館は、日本ペンクラブとの共催で、「シリーズ・いま、世界の子どもの本は？」と題した世界各国の児童書に関する講演会を開催しています。

シリーズ第8回は、「いま、スペイン語圏の子どもの本は？」と題して、翻訳家の宇野和美氏にお話しいただきます。

宇野氏は、出版社勤務を経て、現在第一線で活躍されているスペイン語翻訳家です。訳書には、マルタ・カラスコ『むこう岸には』（ほるぷ出版）、ジョアンヌ・オープンハイム『ポインセチアはまほうの花』（光村教育図書）、アルフレッド・ゴメス＝セルダ『雨あがりのメデジン』（鈴木出版）、ハビエル・セルカス『サラミスの兵士たち』（河出書房新社）ほか、多数の作品があります。また、「日本ラテンアメリカ子どもと本の会（CLIJAL）」の発起人の一人として、子どもの本を通じて日本とラテンアメリカをつなぐ活動も行っています。

入場は無料です。ぜひご参加ください。

- 日 時 10月11日（土）14:00～16:00
- 会 場 国際子ども図書館3階ホール
- 講 師 宇野 和美 氏（翻訳家）
- 司 会 森 絵都 氏（作家、日本ペンクラブ「子どもの本」委員長）
- 対 象 中学生以上（定員約100名）
- 申込方法 8月下旬以降、国際子ども図書館のホームページに掲載する予定です。

○問合せ先

国立国会図書館 国際子ども図書館 企画協力課 企画広報係

電話 03（3827）2053（代表）



お知らせ

■ 平成26年度

「国立国会図書館国際子ども 図書館児童文学連続講座— 国際子ども図書館所蔵資料 を使って」

全国の各種図書館等で児童サービスに従事する図書館員等を対象に、国際子ども図書館が広く収集してきた国内外の児童書および関連書を活用した児童文学連続講座を開催します。

- 総合テーマ 「児童文学とそのマルチメディア化」
- 総合監修 川端 有子（日本女子大学家政学部児童学科教授、国立国会図書館客員調査員）
- 日時 11月10日（月）～11日（火）
- 会場 国際子ども図書館3階ホール
- 対象 現在、図書館等において児童サービスに従事している方。
- 定員 60名（原則、1機関1名。）
応募多数の場合は調整します。複数名で応募する場合は、優先順位をつけて申し込んでください。なお、2日間連続して受講できる方を優先します。
- 参加費 無料。ただし、旅費・滞在費等は受講者負担です。
- 申込方法 国際子ども図書館ホームページ（<http://www.kodomo.go.jp/>）
> 研修・交流 > 児童文学連続講座 > 講座の告知をご覧ください。
<http://www.kodomo.go.jp/study/chair/notice.html>
- 問合せ先 国立国会図書館 国際子ども図書館 企画協力課 協力係
〒110-0007 東京都台東区上野公園12-49
電話 03（3827）2053（代表） FAX 03（3827）2043
電子メール kenshu@kodomo.go.jp



お知らせ

■ 国際子ども図書館講演会 「ドイツの児童文学作家クラ ウス・コルドン講演会 わたしの物語作法—古きベ ルリンの若者たち」

国際子ども図書館は、世界的な児童文学作品の国内への紹介、普及を目的として、ドイツの著名な児童文学作家クラウス・コルドン氏を招き、講演会を開催します。講演会では、コルドン氏の講演に加え、作品への理解を深めるため、ドイツ文学者であり、翻訳家でもある酒寄進一氏に作品解説等を行っていただきます。

また、この講演会は、大阪府立中央図書館および大阪国際児童文学振興財団との共催により、大阪府立中央図書館でも実施します。いずれも入場は無料です。どうぞご参加ください。

- 主 催 国立国会図書館国際子ども図書館
大阪府立中央図書館
大阪国際児童文学振興財団
- 日時・会場 【東京講演会】 11月29日（土）13:00～16:00
国際子ども図書館3階ホール
【大阪講演会】 11月30日（日）13:00～16:00
大阪府立中央図書館2階大会議室
※両講演会とも逐次通訳あり。内容は東京と大阪で若干異なります。
- 講 師 等 クラウス・コルドン氏（ドイツ児童文学作家）
酒寄 進一 氏（ドイツ文学者、翻訳家、和光大学表現学部教授）
- 通 訳 マライ・メントライン氏（ドイツ語講師、翻訳家。※東京のみ。）
- 対 象 中学生以上（東京講演会定員100名、大阪講演会定員80名）
- 申 込 方 法 【東京講演会】
8月中旬頃、国際子ども図書館のホームページに掲載する予定です。
【大阪講演会】
8月中旬頃、大阪府立中央図書館および大阪国際児童文学振興財団のホームページ等に掲載する予定です。
- 問 合 せ 先 【東京講演会】
国立国会図書館 国際子ども図書館 企画協力課
電話 03 (3827) 2053 (代表)
【大阪講演会】
大阪府立中央図書館 電話 06 (6745) 0170 (代表)
大阪国際児童文学振興財団 電話 06 (6744) 0581

お知らせ

■ 新刊案内

国立国会図書館の 編集・刊行物



外国の立法 立法情報・翻訳・解説 第260号 A4 160頁

季刊 1,944円 発売 日本図書館協会 (ISBN 978-4-87582-763-4)

<主要立法(翻訳・解説)>

無人航空機の国内飛行をめぐるアメリカの動向と立法

アメリカにおける性的図画の流布を処罰する州法—リベンジポルノ等の犯罪化
に関する各州立法動向—

フランスにおける2010年の地方公共団体改革

ドイツにおける秘密出産の制度化—匿名出産及び赤ちゃんポストの経験を踏ま
えて—

イタリアにおける財政連邦主義実施の動向

韓国の児童虐待処罰法

中国における公共の場所の喫煙規制

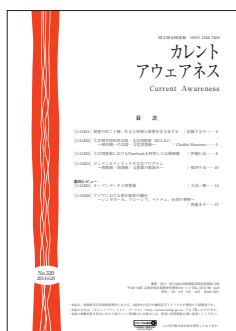


レファレンス 761号 A4 64頁 月刊 1,080円 発売 日本図書館協会

人口減少に対応したドイツ都市計画法の動向

「クリミア後」の国際政治—ウクライナ危機の影響をめぐって—

戦後主要政党の変遷と国会内勢力の推移(資料)



カレントアウェアネス 320号 A4 24頁 季刊 432円 発売 日本図書館協会

辞書の向こう側：生きた用例と辞書を往き来する

大学間共同利用言語・文化図書館(BULAC)—欧州随一の言語・文化図書館—
大学図書館におけるFacebookを利用した広報戦略

ロンドンオリンピックの文化プログラム—博物館・図書館・文書館の取組み—

<動向レビュー>

オープンデータと図書館

アジアにおける納本制度の動向—シンガポール、マレーシア、ベトナム、台
湾の事例—

入手のお問い合わせ

日本図書館協会

〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14 電話 03(3523)0812

CONTENTS

- 02 <Book of the month - from NDL collections>
Shōnen bunyū 4th issue, regional *dōjinshi* by young contributors:
from the magazine collection of the *Nunokawa Bunko*
- 04 Welcome to the Lab: the birth, present and future of the NDL Lab
- 06 Books open door to knowledge: the “digital reading support system” extends reading
- 09 How about contributing to the knowledge of the advanced information age?: attempt at digital reprinting in the Japanese materials by crowdsourcing
- 12 From papyrus to digital: education for librarians at the National School of Palaeography and Archival Studies (École nationale des chartes)
- 17 Books not found in the NDL: in search of periodicals from pre-war period to the Occupation
- 20 Travel writing on world libraries: The Library of Parliament, Canada
- 27 <Tidbits of information on NDL>
Maps for maps
- 28 <Books not commercially available>
○ *Zuroku kiriyū karakuri ningyō shibai*
- 29 <Announcements>
○ Temporary stoppage of library service during transfer of materials from Tokyo Main Library to Kansai-kan
○ Call for participation in the user questionnaire survey on user registration
○ Kaleidoscope of Books (16), “The Dawn of Modern Japanese Architecture - focusing on architectural design competitions”
- Small exhibition in the Kansai-kan (16): “Dreams of Space, from the ancient view of the universe to the Hayabusa Project”
○ NDL Database Forum in the Kansai-kan of the NDL: libraries and databases from the perspective of studies of ruins
○ Training program on digitization of materials FY2014
○ Exhibition at the International Library of Children’s Literature “Barrier-free Picture Books from Around the World - IBBY Outstanding Books for Young People with Disabilities 2013”
○ Series: What’s Happening with Children’s Books in the World? (8) What’s Happening with Children’s Books in Spanish-speaking countries?
○ ILCL Lecture Series on Children’s Literature FY2014 - utilizing the ILCL collections
○ Lecture at the International Library of Children’s Literature: Lecture by Mr. Klaus Kordon, writer of children’s literature in Germany - “My way of writing: Youths in old Berlin”
○ Book notice - Publications from NDL

国立国会図書館月報

平成26年7/8月号 (No.640/641)

平成26年7月20日発行 定価540円
(本体500円)

発行所 国立国会図書館

編集責任者 小寺正一

〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03(3581)2331(代表)
FAX 03(3597)5617
E-mail geppo@ndl.go.jp発売 公益社団法人日本図書館協会
〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14
電話 03(3523)0812(販売)
FAX 03(3523)0842
E-mail hanbai@jla.or.jp

印刷所 株式会社ブルーホップ

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。
本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。
本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>) >刊行物>国立国会図書館月報でご覧いただけます。



「東京十二題 こま形河岸」
川瀬巴水画 渡辺版画店 大正8（1919）
1枚 26.3×39.1cm
<請求記号 寄別7-6-1-1>

国立国会図書館月報

平成26年7月20日発行（毎月1回20日発行）
（7/8月号通巻640/641号）

発売：公益社団法人 日本図書館協会 定価540円（本体500円）